

世田谷区御嶽山古墳出土遺物の調査

松崎元樹

一 はじめに

学習院大学史料館の収蔵品中には数多くの文書を中心とする歴史史料の他に、貴重な考古資料も含まれている。今回調査を実施した遺物もその中の一つで、学習院輔仁会史学部により、一九五〇（昭和二五）年に世田谷区の御嶽山（御岳山）古墳から発掘されたものである。この時の発掘調査の詳しい経緯については、徳川義宣氏による報告文（本誌掲載）を参照願いたい。

出土遺物のうち、二領の鍔留短甲についてはすでに学界に紹介¹され、世田谷区立郷土資料館によってレプリカまで製作されている。しかしながら、同調査時に一括して出土した他の遺物類は、長い間その具体的な内容や所在に関して一切不明のままであった。

そんな中で、幸いにも一昨年より開始された本史料館による『旧制学習院歴史地理標本室移管資料』の目録作成作

業に伴い、本資料が収蔵施設の片隅より、木製のコンテナ数箱に分かれた状態で発見された。これらの遺物は、鉄製の武器・武具類を中心とするものである。出土後、約半世紀を経ているため、かなり錆化と劣化が進行してはいるものの、資料の重要性に鑑み、再整理と実測作業を主とする調査を実施してきた。その結果、本資料が多摩川流域のみならず、広く関東地方の中期古墳文化を考える上で、きわめて興味深い内容を有していることが判明した。ここに、出土遺物に関する基礎的調査の成果と、それに若干の検討を加えて報告したい。

二 御嶽山古墳について

御嶽山古墳は世田谷区等々力一丁目に所在し、多摩川下流の左岸に沿って発達する、標高三〇メートル付近の台地上に占地する。古墳の西側には、矢沢川によって開析された谷を挟んで、近年本格的な発掘調査が行われた野毛大塚古墳^②が存在する。野毛地域周辺には、段丘上に二〇基以上の古墳が築かれており、野毛古墳群と称されている(図一上)。また、さらに下流の大田区側には、宝萊山古墳・亀甲山古墳のような一〇メートル級の前方後円墳二基を含む、およそ三〇基程で構成される田園調布古墳群が分布している。その分布や立地条件をみても、景観的に両者を厳密に区分することが困難であり、一括して荏原台古墳群とも呼ばれている。

御嶽山古墳は現在墳丘の一部が削られているものの、住宅地の中に保存されている。墳丘の規模や形態に関しては従来径四二m、高さ五mあまりの円墳と考えられてきたが、一九九二(平成四)年に世田谷区教育委員会により実施された周濠部の調査により、全長五二mの帆立貝式前方後円墳と推定されている(図一下)^③。

世田谷区御嶽山古墳出土遺物の調査

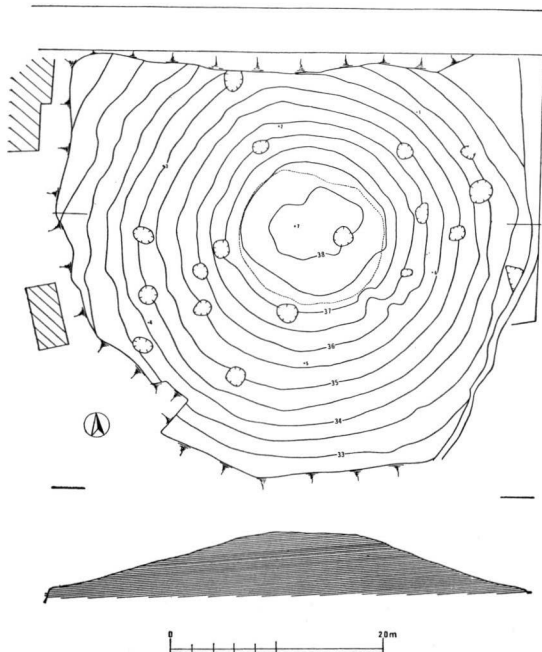
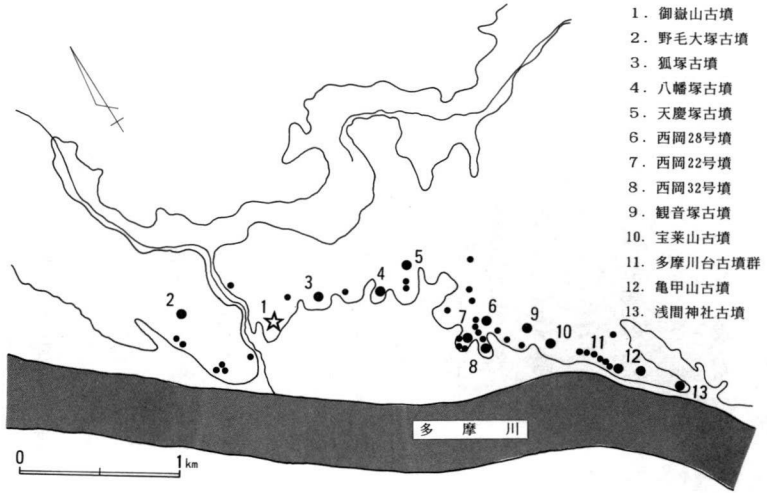


図1 御嶽山古墳周辺の古墳分布と墳丘実測図

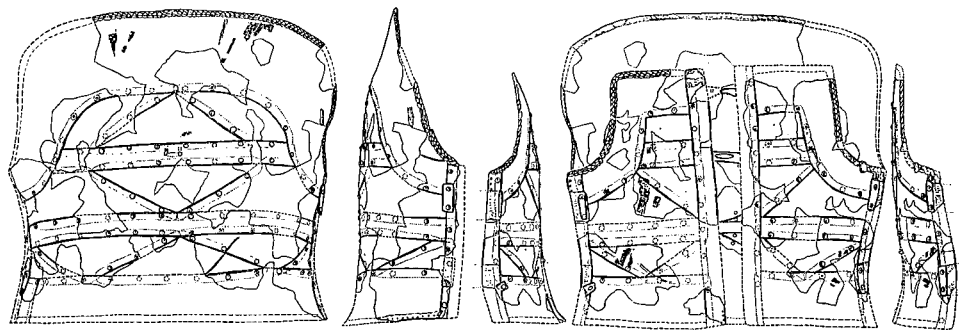
ここで、御嶽山古墳に関するこれまでの調査や研究について整理しておきたい。

一九一七（大正六）年七月、笠井新也氏によって、墳形の略測図と出土品の鈴鏡が『考古学雑誌』に紹介された。⁽⁴⁾鏡の所有者は豊田濱吉という人で、自ら古墳より掘り出したという。略測図によれば、径二九間、高さ四間の円墳であり、墳頂は開墾されて畑地になっていたという。墳丘の周囲からは円筒埴輪や川原石（葺石）が多量に検出されたらしい。踏査の際、笠井氏により須恵器片と土師器片が採集されている。聞き取りによれば、「内行花文鏡」は墳頂南に斜面を一〜二尺下った地点で、地下深さ二尺程のところから出土したという。さらに、これより西の斜面からも刀剣片を掘り出したとされている。笠井氏は二点の遺物の出土状態からみて、主体部とは別に故意に埋納されたものと考えられている。

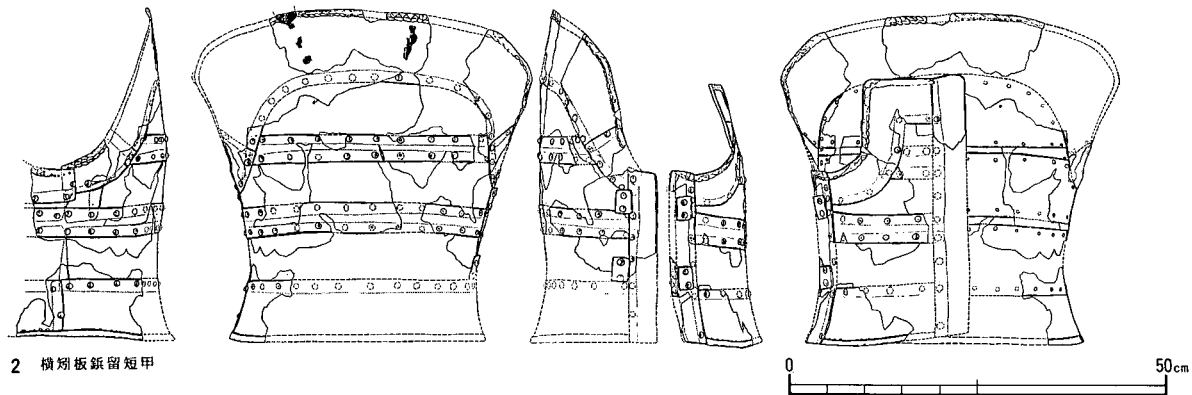
鈴鏡の出土位置は確かに埋葬主体部から大きく南にはずれているので、笠井氏の論拠も否定しがたい部分もある。しかしながら、墳丘部がすでに畑と化し、一部耕起が深く及んでいたとすれば、この鏡ももともと主体部にあった可能性がある。つまり、中心的な主体部とは別に、南に片寄った位置にもうひとつの主体部があって、偶然そこから出土したことも十分考えられる。複数の主体部の存在は、近隣の野毛大塚古墳の事例をみても予想される。

昭和初年の西岡秀雄氏による踏査⁽⁵⁾では、第十号墳（俗称「御嶽さん」）とされた。氏によれば、一九三二（昭和七）年ころに、松野正徳氏により直刀や土器片が採集されたという。墳頂には、いつしか「御嶽大権現」と刻む小石祠が立てられ、七鈴鏡が近くの等々力満願寺に所蔵されていることが記されている。

その後、一九五〇（昭和二五）年四月一日〜一三日にかけて、学習院輔仁会高等科史学部五名により、墳頂部を中心とする発掘が行われた。表土から約七〇cmの深さより鉄製遺物が出土し、その範囲は東西二m、南北五〇cm内外におよぶ。この時の調査で粘土槨と木棺（形式不明）の痕跡が検出されている。今回報告する遺物は、当該時に一括



1 三角板紙留短甲



2 横列板紙留短甲

図2 短甲実測図 (1/10)

して出土したものであり、ほぼ現位置を保った状態であったと推定される。

一九七一（昭和四六）年になって、世田谷区史編纂事業の一環として、早稲田大学考古学資料室によって古墳の測量調査が行われている。⁽⁶⁾一九七五（昭和五〇）年には、世田谷区史編纂さん室により『世田谷区史料第八集―考古編』が刊行され、満願寺の鈴鏡の実測図と学習院大学で所蔵していた短甲が掲載された。⁽⁷⁾また、短甲の推定復元図が田中新史氏により作成され、考古学的な観察と検討がはじめて加えられた。その後、二領の短甲は接合・復元され、何故か、世田谷区立郷土資料館に長年の間保管されていた。この間の寄贈、寄託に関する正規の手続きは一切なされていない。⁽⁸⁾

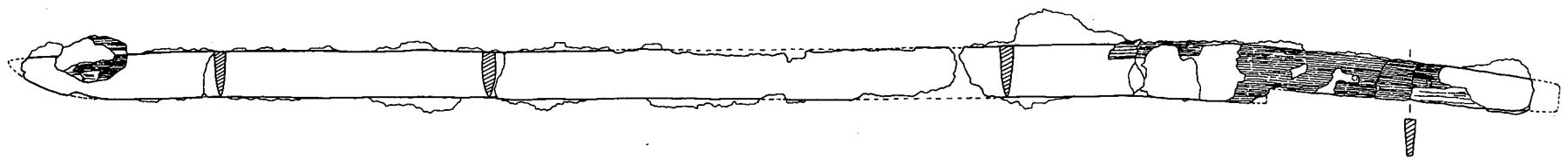
一九七八（昭和五三）年、田中氏により出土短甲二領についての詳細な論考⁽⁹⁾が発表され、その特質および編年的な位置づけがなされている（図二・図版一・二）。さらに、歴史的な意義についても広い視野からの検討が加えられている。今日では、古墳時代の武具研究の基本的文献として高く評価されている。⁽¹⁰⁾

三 出土遺物について

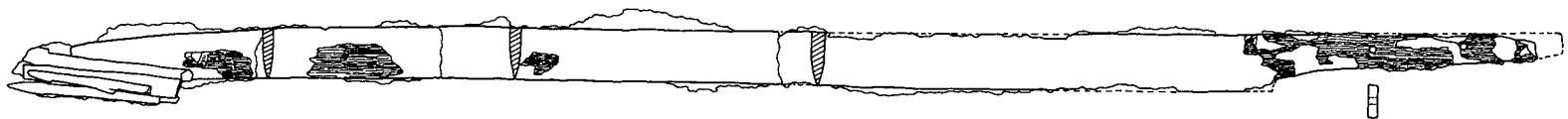
今回新たに発見された遺物は、鉄刀五・鉄剣四・鉄銚一・石突一・胡籙金具二・鉄鏃約一〇〇・鉄刀子一・釘状鉄製品三・円筒埴輪片五および短甲片少量である。

以下、各遺物についてみていきたい。

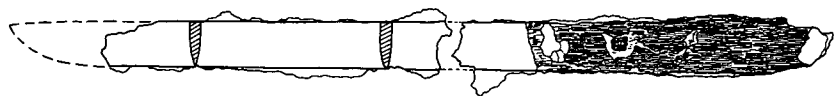
鉄刀（図三―1、4・図四―5・図六）



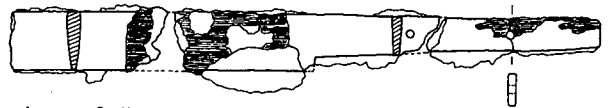
1 铁刀 (1)



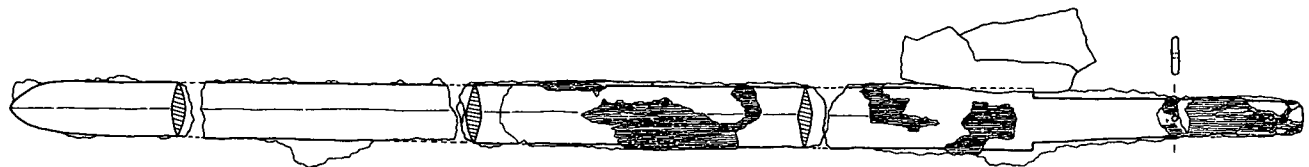
2 铁刀 (2)



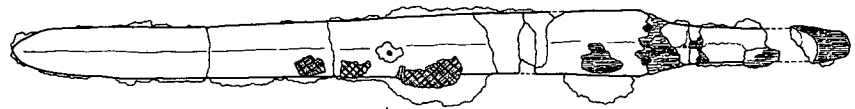
4 铁刀 (4)



3 铁刀 (3)



5 铁剑 (1)



6 铁剑 (2)



图3 铁刀·铁剑实测图 (1/4)

鉄刀(一) 刀身は四〜五片に折損している。全体に錆化が著しく、土塊等が付着した状態である。刀身の一部は接合不可能な箇所が認められるが、全長九一・五cmを測る直刀である。このうち、刀身の長さは七五・三cmを有する。茎(把)の先端はやや欠損するが、長さは一六・二cmを測る。

刀身の造込は平造で、切先はいわゆるフクラを呈する。関部は欠損しているため明瞭ではないが、おそらく片関と考えられる。刀身自体は関付近から把にかけて、大きく刃部側に湾曲している。刀身幅は切先で二・七cm、関ちかくで三・五cmを有しており、厚みは〇・六五〜〇・八cmを測る。茎は幅二・一〜二・五cm、厚み〇・七cmを有し、刃部側がやや薄めにつくられている。目釘孔は二箇所認められ、各々径〇・二五cmを測る。

切先付近の刀身平側に、棺材と考えられる木質片が付着する。また、関にちかい刀身棟寄りのところには、樹皮様の有機物や銅錆片が付着するが、これらは胡籙の部品の一部と認識できる。茎にも把木と思われる木質が顕著に認められる。

鉄刀(二) 刀身は全体で四つに折損しているが、すべて接合する。切先は鉄鏃塊が錆着しているため、形状は明確ではないが、おそらく先端部は欠損しているとおもわれる。茎(把)についても剝離が著しく、その遺存状態はわるい。鉄刀の現存長は七七・二cmで、刀身の長さは六三・二cmを測る直刀である。推定される全長は約八〇cmあまりで、刀身の造込は平造である。刀身は切先に向かって刃部側にやや湾曲している。刀身の幅は切先で二・五cm、関で三・〇cmを測り、厚みは〇・六〜〇・七cmを有する。切先付近の刀身平には、鉄鏃塊の他に木質及び樹皮状の物質が付着しており、おそらく胡籙の一部と考えられる。

茎(把)は一四・〇cm、幅は一・五〜二・五cmを有する。目釘孔は二か所に認められ、各々の径は〇・三cmほどである。茎全体には木質が多く付着しており、把の痕跡と思われる。さらに、関ちかくの刀身棟側には、樹皮様の有機

物が観察されるが、これは鞘の上部に巻かれていたものではないかと考えられる。

刀身に鉄鎌や胡籙片が付着していることからみて、本刀が胡籙と一部重なる形で埋納されていたと推定できる。また、鉄刀(一)についても同様の状況が窺えることから、二口の鉄刀はともに揃えられた恰好で、ごく近い位置に副葬されていた可能性がよい。

鉄刀(三) 刀身の一部と茎(把)の残欠で、全体の四分の一から五分の程度が遺存する。各折損箇所での接合はできない。現存長は三一・一cmで、刀身の造込は平造である。全体に銹化が著しく、関の状態は明確にし得ないがおそらく片関に復元できる。刀身の幅は、関で三・〇cm、厚みは〇・八cmを有する。関にちかい箇所には、鞘の木質が多く遺存している。茎は長さ一五・〇cmで、関から先端に向かってしだいに幅を減じている。目釘孔は二か所あり、径は両方とも〇・四cmを測る。また茎には、把の痕跡を示す木質が付着している。

鉄刀(四) 刀身部のみを残欠で銹化が著しい。大きく二つに折損しているが、接合はできない。現存長は三八・三cmを有する。刀身の造込は平造で、幅は二・五cm、厚みは〇・六cmを測る。把寄りの部分に鞘の木質が多く認められる。鉄刀(三)と(四)は身幅や遺存状態からみて、同一の鉄刀である可能性もあるが、明確さに欠けるため、一応、別々の個体として扱っておきたい。

鉄刀(五) 鉄剣(一)および胡籙金具⑤と銹着する。把から関部にかけての残欠で、現存長は九・一cmを測る。刀身の幅は二・一cm、茎の幅は一・三〜一・七cmを測る平造の直刀である。茎には径〇・二cm程の目釘孔がある。刀身の厚みは折損部で〇・七cmを測る。刃関の状態は明瞭ではない。把には木質が多く遺存しており、木装の把と推定される。身幅からみて、短刀にちかい形式の鉄刀と考えられる。

この他に、長さ四・〇cmの鉄刀身の小片がある(図四—5)。身幅は二・八cm、厚みは〇・七cmを有する。平造で

身幅から推定すると、鉄刀(四)に伴う破片の可能性がある。

鉄剣・鉄鉾(図三—5、6・図四・図版三)

鉄剣(一) 剣身は大きく四か所で折損しており、それぞれの接合面はすでに失われている。刃部はほぼ直線的につくられている。鉄剣の推定全長は六七・八cmで、刃部の長さは五三・六cmを測る。関部は錆化が著しいため、明瞭さを欠くが、茎(把)の長さは一四・二cm程と考えられる。関の両端の切込みは〇・四cmで、直角にちかい形状と推定される。刃部の幅は、関でもっとも広く三・二cmを測り、切先に向かってわずかに幅を狭めている。切先ちかくでは幅二・八cmを有し、厚みは〇・七〇・八cmと比較的厚重なつくりを示している。身の造込は中央に鑄が入る、断面菱形形状を呈するものであるが、表面の錆が著しいために、鑄の稜線はそれほど明確ではない。剣身の表面には、数か所に鞘の木質が付着している。また、関の付近には、鉄刀(五)と胡籙金具⑤が破損した状態で錆着している。

茎は幅一・八〇・二・四cm、厚み〇・三五cmを測る断面長方形を呈するもので、二か所に目釘孔をもつ。孔径は〇・二cmである。茎の先端部分には把の木質が遺存している。

鉄剣(二) 剣は全体で四〜五片に折れているが、茎の先端を除いては、すべて接合できる。剣身は切先ちかくでやや片側に曲がっている。鉄剣(一)に比べ、小形の剣といえる。推定される全長は四四・一cmで、刃部の長さは三三・一cmを測る。刃部の幅は関でもっとも広く三・六cmを有し、切先に向けて少しずつ細くなって、先端で二・一cmほどである。刃部の造込は、断面が菱形を呈し、中央に鑄の入るものであるが、稜線はそれほど明瞭ではない。刃部の厚みは、関で〇・六cm、切先で〇・四cmを測る。刃関の切込みは直角ではなく、把への移行は緩やかである。茎(把)の長さは推定で一・一〇cm、幅は一・七二・四cmを有する。関付近と茎の先端には、胡籙本体の一部と考えられる樹皮状の編物や、金銅片が付着した痕跡が認められる。

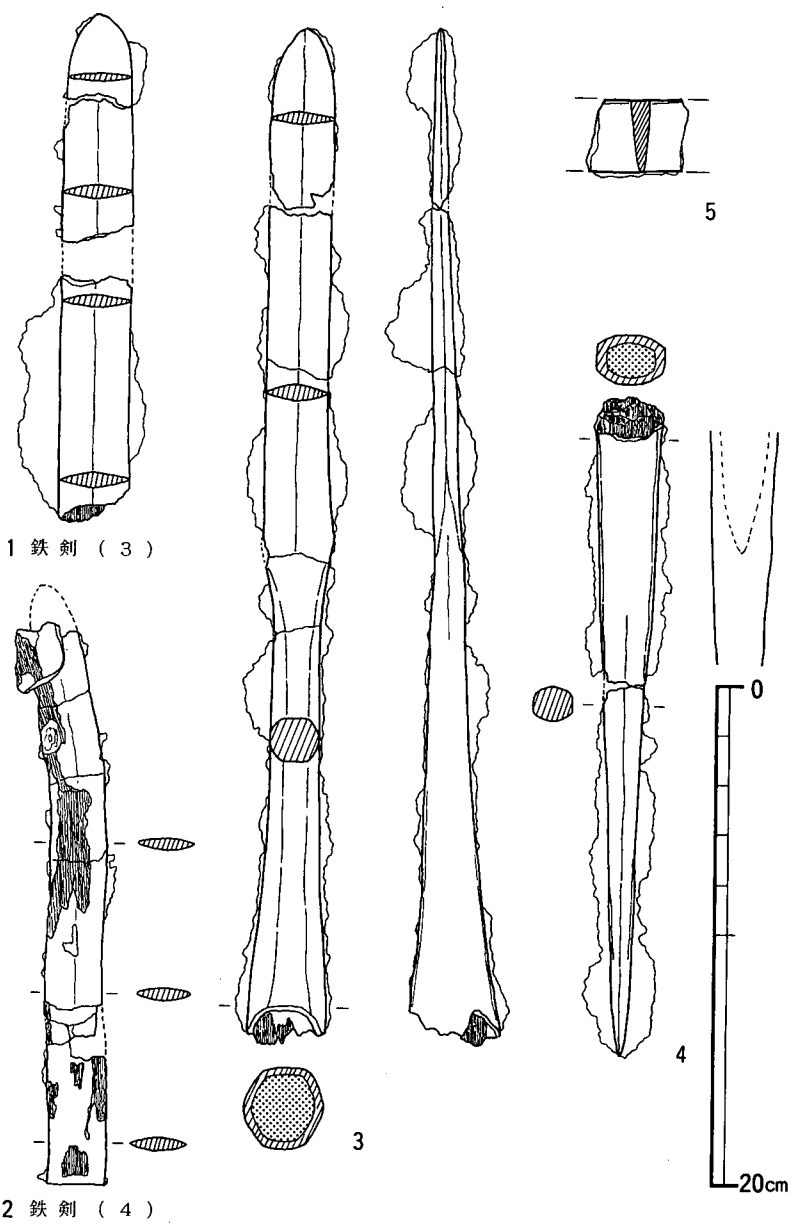


図4 鉄剣・鉄鏃実測図 (1/3)

鉄剣(三) 刃部の残欠である。三つの破片により復元実測したもので、それぞれは接合しない。全体に錆化が著しいが、切先は良く原形をとどめている。現存する剣身の推定長は二二・〇cmで、刃部幅は二・五〜二・八cmを有する。身の断面は菱形状を呈し、中央に稜線が認められる。厚みは〇・三〜〇・五cmで、切先はかなり薄手に仕上げられている。本剣身に伴う茎(把)の断片は、資料中には存在しなかった。

鉄剣(四) 鉄剣(三)と同様刃部のみが残欠である。現存長は二二・一cmで、身幅は一・九〜二・二cmを測る。切先および茎を欠損する。剣身は全体で五か所にわたって折れており、それぞれは過去に一度接合されている。この時の接合による歪みを勘案しなければならぬが、身の二か所ですみやかに屈折した形を呈している。鉄剣自体の遺存状態が悪いので、いわゆる「蛇曲剣」(あるいは蛇行剣)と呼べるものかどうか、判断できない。ただし、刃部の表面に木質が多量に付着していることから、鞘を伴う剣である可能性が高いといえる。

身の断面は、レンズ状の菱形を呈するもので、厚みは〇・五cmを有する。中央の稜線は木質が多く付着しているためか、明瞭ではない。

鉄銚(図四一3) 銚身は切先より七cmのところ折損がみられ、袋部の先端にも欠損が認められる。全体に錆化が著しく、一部剝離している箇所もあり遺存状態はわるい。鉄銚に関しては、これまで後藤守一・白杵勲氏等の分類がある。これを参考にすれば、銚身は剣身形を呈する広鋒銚に属すると考えられる。

銚の推定全長は四〇・八cm、身の長さは二〇・六cm、袋部は長さ二〇・二cmを測る。身の造込は鑄造で、断面は菱形を呈する。切先部のつくりは狭鋒のものに比べ、やや平造にちかい形状をなす。身幅は闊でもっとも広く二・九cmを有し、切先に向かってわずかに細くつくられている。切先付近では幅二・六cm程となる。

身関は両側がわずかに突出するだけで、袋部との境はそれほど明確ではない。袋部は関付近で一度絞られ、先端に

向かってすそ広がり幅を増している。袋部の幅は一・九〜三・二cmで、断面は六角形状を呈している。臼杵氏のいう「六角袋造り」⁽¹²⁾である。袋部の末端から約七・五cmまでが着柄部と考えられ、内部には柄の木質が遺存している。目釘孔は観察できない。

本資料も、過去に二〜三か所で接合されているが、全体に歪んで接合されているため、補正しながら実測を行っている。

石突(図四—4) 鉄銚と対になるもので、銚の袋部と同じく、断面が六角形状を呈している。身の中央部付近で二つに折損しており、銹化及び剝離が著しく、遺存状態はきわめてわるい。

現存長は二六・四cmで、袋部の幅は二・七cm、身の中央では幅一・五五cmを測る。先端は三角形に細く尖る形態を示す。身の断面形は袋部で扁平な隅丸の六角形を呈しているが、中央部では正六角形にちかい形状をもっている。着柄部は末端より約五・〇cm程で、銚身と同様に内部には木質が遺存している。

胡籙金具(図五・六・図版三)

矢を納める胡籙の吊手金具と考えられるもので、刺金付絞具・板(帯)状金具・三輪玉形の中円板等によって構成される。⁽¹³⁾本来二つの吊手金具で一对となり、坂靖氏らの復元では、胡籙本体の背板表側の左右上部に装着されたものである。⁽¹⁴⁾①と②二つの吊手金具が存在する。③はほぼ完存するが、④は欠損が著しく、中円板片と下端の隅丸長方形板状金具の残欠が遺存するのみである。

吊手金具② 一部に欠損があるが、ほぼ全体の形が明らかかなものである。表面の銹化が著しいため、細部のつくりに関しては不明な点も多い。

金具は金銅製の刺金付絞具、鉄製の長方形板状金具および隅丸長方形板状金具と、中央を楕円形に造り出した金銅

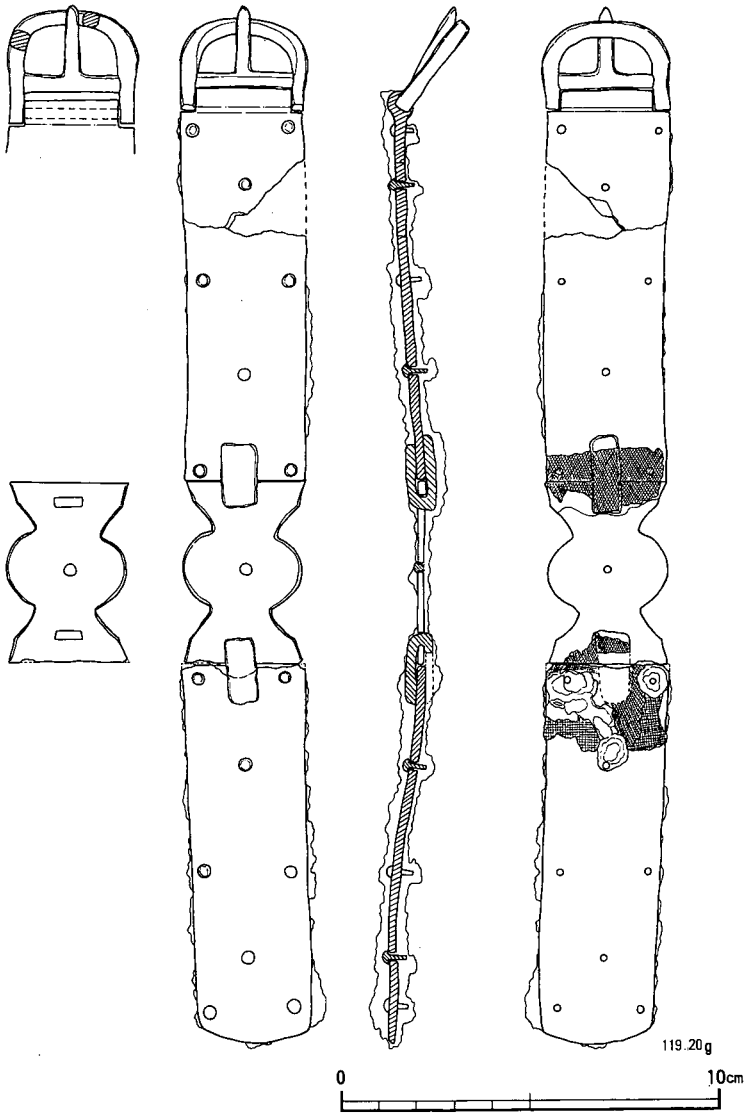


図5 胡籥吊手金具①実測図(1/2)

横軸棒は環状金具の内側左右のほぞ穴に差し込まれている。絞具の本体は刺金の横軸棒と平行につけられている。絞具を、長方形板状金具の上端を丸めた軸受内に巻き込む形で連結している。言うまでもなく、これにより絞具自体も遊動性をもっている。絞具につづく長方形板状金具は、長さ一〇・三五 cm、幅三・二 cm、厚み〇・二五 cmを有するもので、上端は絞具の脚が収まるよう両角に削り込みがある。表面には計八本の金銅製鋸が中央の二鋸を共有する形で、

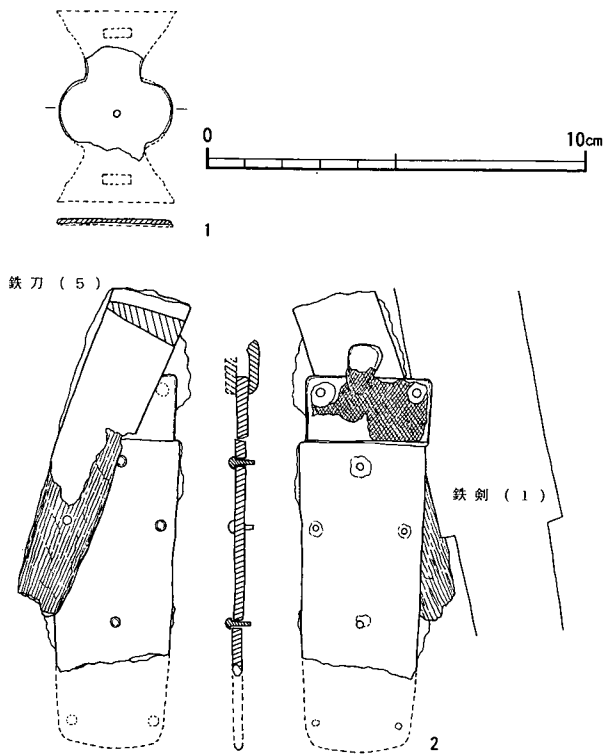


図6 胡籛吊手金具①実測図 (1/2)

製の中円板によってつくられている。したがって、帯状の部分は連結される三枚の板状金具により構成されていることから、「三枚造」の吊手金具とされる。金具の全長は二七・五 cmを測るが、全体にわずかに湾曲しているため、復元長は二七・七〜二七・八 cm程度になる。これまで日本で出土している三枚造の吊手金具としては、もっとも長いものであろう。

絞具は長さ三・〇 cmで、幅は三・四 cmを測る。先端部はやや丸みを帯びている。表面には金鍍金がよく遺存している。刺金は「T」字形につくられている。

上と下五本ずつの二単位に施されている。中円板は長さ四・八cm、厚みは〇・一五cmを有するもので、表面の金鍍金はすべて剥れている。楕円の中心には径〇・三cmほどの金銅製鉾が打たれている。上下端の中央には、〇・二×〇・七cmの長方形の透かし孔が穿たれ、その孔に幅〇・九cmの鉄製の舌状金具が通されて、コ字形に折り曲げられ、板状金具に連結されている。舌状金具は別造りと考えられることから、板状金具との接合は加熱処理による鍛接ではないかと推定される。管見によれば、この種の手法を採る吊手金具は、今のところ我が国の出土品の中には見いだせない。帯状部分の下端を構成する板状金具は、隅丸長方形状を呈しており、上部の板状金具と同様に、計八本の金銅製鉾が二単位で打たれている。金具の幅は二・九〜三・三cmを測り、先端に移行するにたがって、幅を減じている。中円板と上、下の板状金具との連結部付近の裏面には、平織の布と思われる有機質が多量に付着している。他の出土例にも同様な状態がみられることから、これらは胡籛本体を構成する繊維物質の一部が銹着して遺存したものと理解できる。

吊手金具⑥ 本金具も吊手金具②と同様の材質と構造を有している。残念ながら、欠損部分が多く全体を復元することは困難である。中円板は上下端を欠損するが、中央の楕円形板の表面には金鍍金がよく遺っている。幅一・五cmの楕円形部の中央には金銅製鉾が打たれている。

鉄剣(一)と**鉄刀(五)**に銹着する板状金具は、その形状から帯状部下端の隅丸長方形板状金具と考えられる。上部一・六cmの所で折れており、下端部を欠損している。現存部での長さは、舌状金具を含めて九・〇cmで、幅は三・〇〜三・三cmを測る。推定される全長は九・八cm前後ではなからうか。表面には金銅製鉾が六本遺存している。鉾は二単位構成をとるもので、吊手金具②とほぼ同形・同大と推定される。また、隅丸長方形板状金具の裏面上端と中円板との連結部付近に、平織の布片が付着しており、舌状金具の上を覆っている。これも②の吊手金具と同様のあり方

を示している。

鉄鏃 (図七〇九—七二・表一・図版四)

出土資料における鉄鏃の数量は、実測し得たもので七十二本である。他に鏃身や茎部等の小破片が八十数本存在することから、総数は一〇〇本を超えるものと推定される。また鉄鏃は三—一〇数本で束状に錆着しているものが多く鉄鏃塊中の資料については、個々の詳細な観察が困難な状態である。

鉄鏃はすべて長頸鏃に属するものである。なお、鉄鏃の分類や部分名称等については、主に杉山秀宏・田中新史両氏の論考⁽¹⁵⁾を参考とした。

以下、各群別および個別に述べていきたい。

A群 (1—10) 一〇本の鉄鏃が一塊になっている。この中で鏃身から茎部までが遺存するものは四本あまりで全体の大きさの分かる例は少ない。

鏃身が明らかなのは五本ある。1—3が片丸造長三角形鏃に分類され、1の身部長は一五・二cmを測る。鏃身は長さ二・五—三・〇cmを有する。身関の張り出しはゆるい。4は頸部に逆刺のつく片逆刺三角形鏃である。逆刺の先端は欠損している。造込については、鏃塊中にあるため詳らかにし得ない。5は片刃箭鏃で逆刺を含む鏃身の長さは長大で、八・八cmを測る。茎部には樹皮を巻きつけた矢柄を遺す例が認められる。鏃塊の片側には、胡籥本体の一部と認識できる皮革状の有機質が付着している。

B群 (11—18) 八本の鉄鏃が一塊になっており、全体の錆化は著しい。鏃身から茎部まで遺存するものが三例ある。鏃身の明らかなのは四例を数える。11は片刃箭鏃で鏃身の長さは、三・四cmあまりを有する。12と13は片丸造長三角形鏃で、ともに現存長一六・二cmを測る。身部の長さも等しいことから、これらは規格品と考えられる。身関

はわずかに突出する形で、鍔身の両肩に角度をつけて仕上げてある。16は鍔塊中にあるため正確さを欠くが、12・13と等しい身部長を有する長三角形鍔と推定される。

本群を構成する鉄鍔は、異方向に錆着する11の片刃箭鍔を除いて、すべて同形・同大の長三角形鍔の規格品を束ねたものと認識できる。

C群 (19〜25) 七本の鉄鍔が錆着したもので、うち五本が鍔身から茎部まで揃う。鍔身の明らかなのは五例である。19は片丸造長三角形鍔の残欠で、鍔身長は三・四cmを測る。身関の突出はわずかで、全体に長身で剣形を呈している。20と21は鍔身幅がやや広めの長三角形鍔で、現存長一七〜一八cmを有する。造込は明確にし得ないが、おそらく片丸造と考えられるものである。22は片刃箭鍔で逆刺は鋭く、鍔身の長さは三・八cmを測る。身部長は一〇・八cmとやや短身である。図化はできなかつたが、25もほぼ同形の鉄鍔である。逆刺を含む鍔身長は三・六cmを測る。このように、C群には多種類の鉄鍔が含まれている。

D群 (26〜30) 五本の鉄鍔が錆着したもので、頸部下半を欠損する。四本については鍔身が遺存している。すべて長三角形鍔で、造込は両丸造にちかい。鍔身の長さは二・四〜二・六cmで、身関に最大幅をもつ細身の鍔である。大きさや形もよく揃っていて規格品と推定される。

E群 (31〜38) 八本の鉄鍔が一塊になっている。鍔身から茎部まで遺存するのは二例のみである。31は現存長一四・〇cmの片丸造柳葉鍔で、鍔身中央部に最大幅を有する。身関はなく、形状は木葉形で丸みをもつものである。32は茎部を欠損するが、31と同様の鉄鍔である。その他、図示していないが、35が鍔身長二・五cmの片丸造長三角形鍔で、36が鍔身長三・〇cmを測る片刃箭鍔である。

F群 (39〜41) 三本の鉄鍔により構成されるもので、いずれも頸部下半を欠損する。鍔はすべて片刃箭鍔で、身

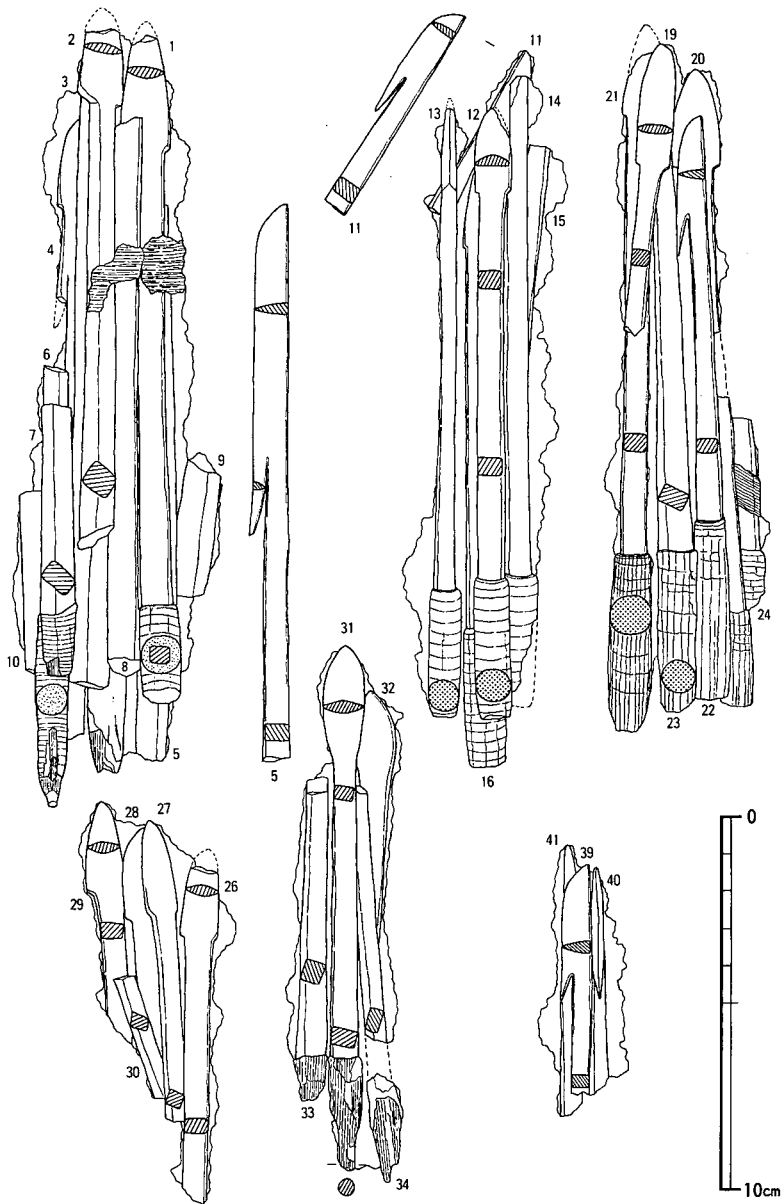


图7 铁鏃实测图(1) (1/2)

世田谷区御嶽山古墳出土遺物の調査

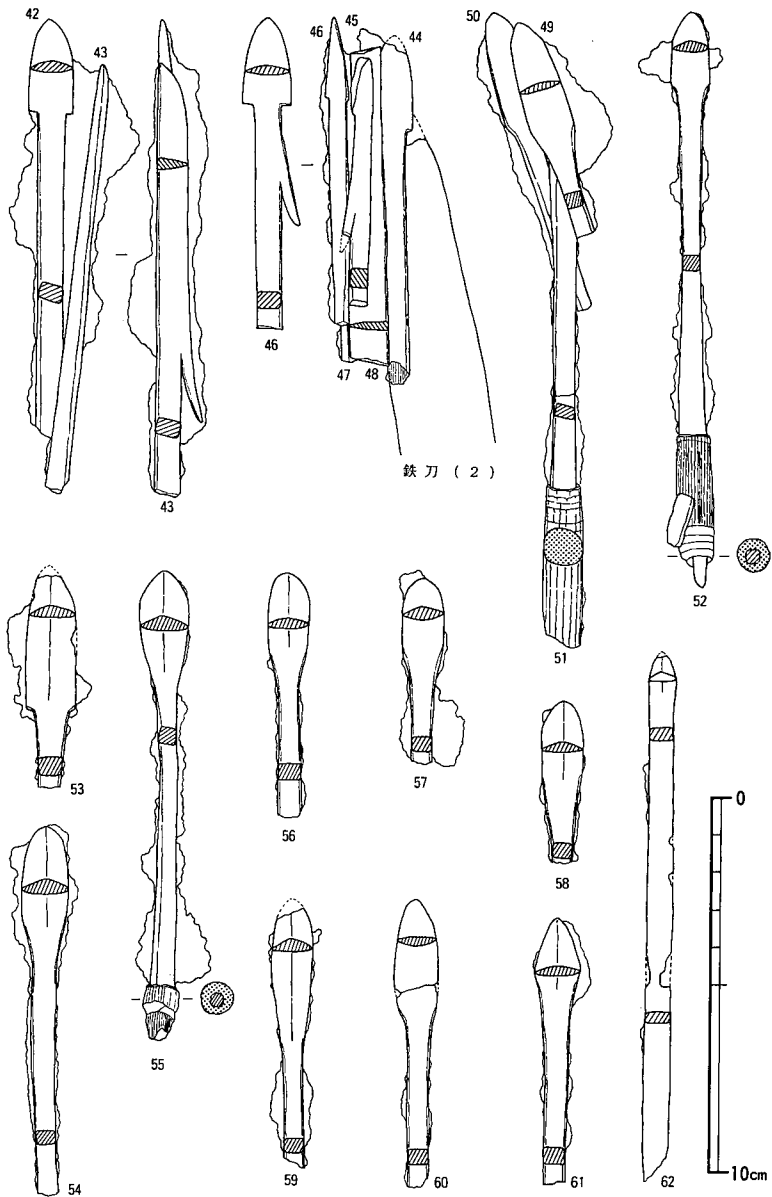


図 8 鉄鏃実測図 (2) (1 / 2)

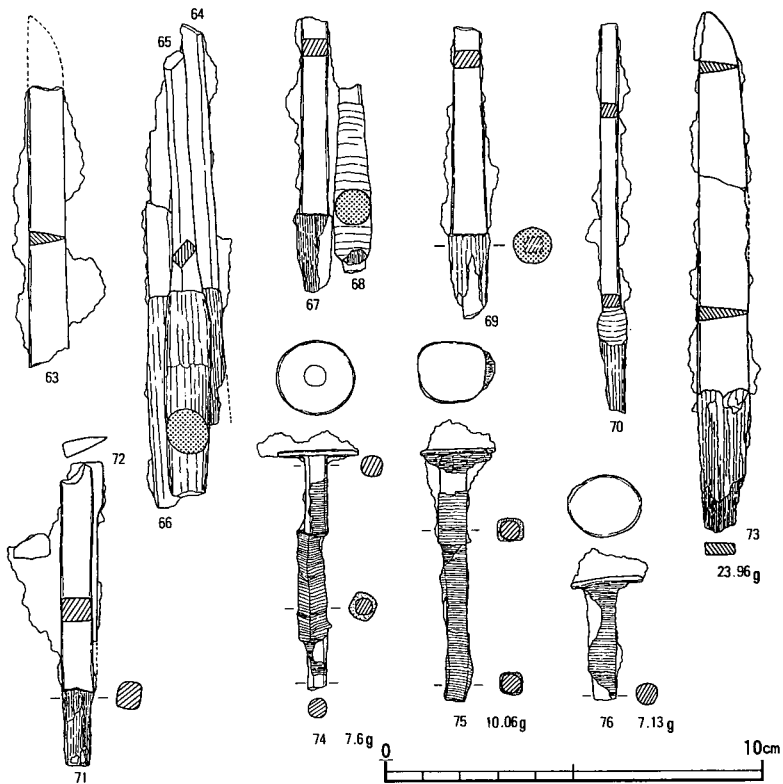


図9 鉄鏃・刀子・釘状鉄製品実測図 (1/2)

部長三・五〜三・八cmとほぼ同形・同大につくられている。C群の22と25の鉄鏃もこれと類似する。

G群 (42・43) 42は鏃身長二・五cmを有する片丸造長三角形鏃で、身関は比較的明瞭である。43は長身の片刃箭鏃の頸部までの破片で、逆刺を含む鏃身長はおよそ九・五cmである。鏃身の先端が刀子形を呈する身幅〇・七cmの鏃である。

H群 (44〜48) 五本の鉄鏃が一塊になって、鉄刀(二)の切先ちかくに鏽着している。いずれの鏃も頸部下半を欠損するが、鏃身の形態は判別できる。44は両丸造長三角形鏃と推定される。45と46はともに片逆刺を有する両丸造長三角形鏃で、鏃身長は二・三〜二・五cm程に復元で

きる。逆刺の長さは46の鏃で二・二cmを測る。47と48はいずれも片刃箭鏃で、八cm以上の鏃身をもつ刀子形の鉄鏃と考えられる。鏃塊中にあるため、詳細な観察は不可能である。

一 群 (49～51) 二本の鉄鏃が錆着したものであり、51のみ茎部まで遺存する。鏃身の明らかなものは、49と50とともに剣身形を呈する長三角形鏃である。鏃身の長さは三・四～三・七cmで、先端には肩部を造り出している。造込は片丸造で、身関はわずかに山形に突出している。51は鏃塊中にあるため、鏃身の形態は明らかにできないが、先の二例と同形の可能性が高い。

J・K・L群 (64～66・67～68・71～72) これらの鉄鏃群は、すべて頸部から茎部にかけての残欠で、形式の異なる例は72の片刃箭鏃一例だけである。

この他、単体の鉄鏃のうちで、52が唯一全形に分かる例である。全長は一五・三cmで、鏃身長二・二cmを測る片丸造長三角形鏃である。身関にはわずかに抉り込みがあり、小ぶりの鏃身をもつ。矢柄の木質がよく遺存している。53も片丸造長三角形鏃であるが、鏃身長が三・六cmと長く、身の中央に稜を有する。54～60は身関の無い柳葉鏃で、鏃身長や形状に少しずつ差が認められる。鏃身の長さも二・四～三・四cmと幅があり、54と56は先端部に丸みを有する。55は頸部への移行箇所につよい絞りがみられる。すべて造込は片丸造で、鏃身中央に稜のあるものも多い。61と62は鑿箭鏃に分類されるもので、鏃身の先端は鋭角をなしている。62は頸部の剝離が著しく、原形よりも全体的に痩せている。また、63は刀子形を呈する片刃箭鏃で、先端は欠損するものの、八cm以上の鏃身を有するものである。

刀子・釘状鉄製品 (図九―73・74～76・図版四)

刀子は鉄製で把の先端を欠損する。全長一三・八cmで、刃部の長さは一〇・一cmを測る。身幅は一・〇～一・三cmで、厚みは〇・三cmを有する。刃部の造込は平造であり、棟は平につくられている。把には多くの木質が付着してお

(単位=cm)

	現存長	鍍身部			頸部			茎部			重量(g)	備考	
		身部長	長	幅	厚み	長	幅	厚み	長	幅			厚み
37	6.1	5.5<	—	—	—	6.1<	0.7	0.5	0.6<	0.9	0.9	30.1	逆刺長 1.6cm 逆刺長 2.4cm
38	6.5	6.5<	—	—	—	6.5<	0.7	0.5	—	—	—		
39	6.0	6.0<	3.7	0.8	0.3	3.2<	0.5	0.3	—	—	—		
40	6.0	6.0<	3.5	0.9	0.3	3.0	0.6	0.5	—	—	—	40.27	
41	7.2	7.2<	3.8	0.6	0.45	3.9<	0.6	0.5	—	—	—		
42	11.1	11.1<	2.5	1.1	0.3	9.6<	0.6	0.45	—	—	—		
43	11.5	11.5<	9.5<	0.75	0.3	4.0<	0.6	0.5	—	—	—		
44	9.1	9.1<	2.5<	1.0	0.3	7.8<	0.6	0.5	—	—	—		
45	6.5	6.5<	1.5<	0.9	0.3	5.0<	0.6	0.5	—	—	—		
46	8.2	8.2<	2.3<	1.2	0.3	5.9<	0.6	0.5	—	—	—		
47	8.0	8.0<	—	1.0	0.4	—	—	—	—	—	—		
48	8.4	8.4<	8.4<	1.0	0.25	—	—	—	—	—	—		
49	5.9	5.9<	3.7	1.1	0.2	2.2<	0.5	0.4	—	—	—		
50	8.2	8.2<	3.4	1.0	0.3	4.8<	0.5	0.4	—	—	—		
51	15.5	8.5<	—	—	—	—	—	—	4.2<	1.0	0.9	36.11	
52	15.3	11.2	2.2	1.0	0.3	9.0	0.5	0.4	4.1	1.0	1.0		
53	5.6	5.6<	3.6<	1.3	0.3	2.0<	0.6	0.5	—	—	—		
54	9.8	9.8<	3.3	1.2	0.4	6.5	0.55	0.4	—	—	—		
55	12.5	11.0<	2.9	1.2	0.4	8.1	0.4	0.4	1.5<	0.9	0.8		
56	6.5	6.5<	3.0	1.1	0.3	3.5<	0.6	0.4	—	—	—		
57	4.9	4.9<	2.7	1.1	0.3	2.2<	0.55	0.35	—	—	—		
58	4.3	4.3<	2.4	1.1	0.3	1.9<	0.5	0.4	—	—	—		
59	6.9	6.9<	3.5<	1.0	0.3	3.4<	0.5	0.4	—	—	—		
60	7.6	7.6<	3.4	1.1	0.2	4.2<	0.6	0.4	—	—	—		
61	7.1	7.1<	2.3	1.1	0.25	4.8<	0.6	0.45	—	—	—		
62	13.9	13.9<	1.2<	0.7	0.25	12.7<	0.7	0.3	—	—	—		
63	7.5	7.5<	7.5<	1.0	0.4	—	—	—	—	—	—		
64	10.5	7.6<	—	—	—	7.6<	0.6	0.5	2.9<	1.0	0.9		
65	11.9	6.4<	—	—	—	6.4<	0.65	0.4	5.5<	1.2	1.1		
66	10.0	4.4<	—	—	—	4.4<	0.6	0.45	6.6<	0.9	0.9		
67	7.3	5.2<	—	—	—	5.2<	0.7	0.5	2.1<	0.9	0.9		
68	5.0	0.5<	—	—	—	0.5<	0.6	0.5	4.5<	0.9	0.9		
69	8.1	6.0<	—	—	—	6.0<	0.8	0.6	2.1<	0.7	—		
70	10.4	7.7<	—	—	—	7.7<	0.5	0.4	2.7<	0.7	0.6		
71	8.1	6.0<	—	—	—	6.0<	0.8	0.6	2.1<	0.7	—		
72	4.8	4.8<	1.5<	1.2	0.4	3.8<	0.8	0.5	—	—	—		
												24.8	

世田谷区御嶽山古墳出土遺物の調査

表1 御嶽山古墳 鉄鏃計測値

	現存長	身部長	鏃 身 部			頸 部			茎 部			重量(g)	備 考
			長	幅	厚み	長	幅	厚み	長	幅	厚み		
1	17.8	15.2<	3.2<	1.0	0.3	12.0	0.7	0.5	2.6<	1.0	1.0	256.0	胡籜附着
2	13.8	13.8<	2.0<	1.0	0.25	11.8<	0.8	0.7	—	—	—		胡籜附着
3	16.7	16.7<	2.5			14.2<	0.7	0.6	—	—	—		詳細不明
4	16.5	16.5<	2.5	1.2		14.0<	0.7	0.55	—	—	—		
5	14.9	14.9<	8.8	0.9	0.3	8.1<	0.7	0.5	—	—	—		
6	11.7	6.5<	—	—	—	6.5<	0.7	0.5	5.2<	1.0	1.0		
7	7.2	5.6<	—	—	—	5.6<	0.9	0.55	1.7<	0.9	0.9		
8	14.9	14.9<	—	—	—	14.9<	0.8		—	—	—		胡籜附着
9	3.8	3.8<	—	—	—	3.8<	0.7	0.5	—	—	—		
10	4.8	4.8<	—	—	—	4.8<	0.6	0.5					
11	6.1	6.1<	3.4	0.75	0.2	4.0<	0.7	0.4				136.4	
12	16.2	12.5	2.3	0.9	0.25	10.2	0.65	0.5	3.7<	0.9	0.9		
13	16.2	12.8<	2.2<	1.2	0.4	10.6	0.6	0.4	3.4<	0.8	0.8		
14	16.3	13.3<	—	—	—	13.3<	0.65	0.5	3.0<	0.9	0.9		
15	12.8	11.5<	—	—	—	11.5<	0.6	0.5	1.3<	0.9	0.9		
16	16.1	12.2	2.5			10.1		0.45	3.7<	1.0	1.0		詳細不明
17	10.0	10.0<	—	—	—	10.0<	0.6	0.4	—	—	—		胡籜附着
18	7.0	7.0<	—	—	—	7.0<	0.55	0.5	—	—	—		胡籜附着
19	7.8	7.8<	3.4	0.9	0.2	4.4<	0.45	0.4	—	—	—		
20	17.0	14.5	2.7	1.1	0.3	11.8	0.6	0.5	2.5<	1.0	1.0	112.0	
21	18.0	13.3	1.6			11.7	0.6	0.5	4.7<	1.0	1.0		
22	15.5	10.8	3.8	0.7	0.25	8.1	0.55	0.4	4.75<	0.9	0.9		逆刺長 1.1cm
23	17.2	12.9					0.6	0.4	4.3<	0.9	0.9		
24	5.1	3.5<	—	—	—	3.5<	0.7	0.6	1.6<	1.0	1.0		皮状物質附着
25	15.8	11.8	3.6<	0.8	0.3	9.6	0.6	0.45	4.0<	1.0	1.0		
26	9.0	9.0<	1.9<	0.9	0.3	7.1<	0.6	0.4	—	—	—		
27	8.1	8.1<	2.6	1.0	0.3	5.5<	0.6	0.5	—	—	—		
28	4.9	4.9<	2.4	1.0	0.3	2.5<	0.6	0.5	—	—	—	42.7	
29	6.1	6.1<	2.5	0.9	0.3	3.6<	0.6	0.4	—	—	—		
30	3.6	3.6<	—	—	—	3.6<	0.5	0.4	—	—	—		
31	14.0	11.0	2.9	1.0	0.3	8.1	0.6	0.4	3.0<	0.9	0.9	87.2	
32	7.1	7.1<	2.8	1.0	0.3	4.9	0.6	0.5	—	—	—		
33	8.6	7.4<				7.4<	0.6	0.6	1.2<	0.8	0.8		
34	10.6	7.0<				7.0<	0.6	0.4	3.6<	0.8	0.8		
35	10.7	10.7<	2.5	1.1	0.35	10.7<	0.7	0.6	—	—	—		
36	3.6	3.6<	3.0	0.8	0.3	0.6<	0.65	0.5	—	—	—		

り、両関と考えられる。全体に身幅に対して短身のつくりを示している。

釘状鉄製品としたものは全部で三点認められる。いずれも、頭部の錆化が著しく、身の表面には木質および皮革状物質が付着している。頭部の径は一・六×二・〇cmの楕円形ないし隅丸方形状を呈し、身の断面は方形にちかく一辺〇・五cmを測る。全長が分かる例はないが、六・七cm以上を有することは確実で、本来は一〇cmほどの長さをもつものと推測できる。

釘使用木棺が一般化するのが古墳時代後期の段階からとすれば、本製品が木棺に伴う可能性は少ない。出土状況が不明なので、あくまでも推測の域を出ないが、胡籛に付属する金具の一部ではないかと考えられる。その根拠としては、製品の表面に皮革状物質が多く遺存していることで、先の吊手金具裏面の状態と良く似ている点である。また、頭部をわざわざ楕円形状に大きく造り出していることから、胡籛の方立部の構造と何らかの関係があり、飾鋌としての機能も想定されるところである。しかしながら、これまでの出土例には認められないことから、その具体的な検証は保留しておく。

円筒埴輪(図一〇)

『等々力大塚』の注記をもつ埴輪片とともに、まとめられていた資料が五点ある。いずれも出土状況は不明であるが、御嶽山古墳からの採集品と考えられる。

1は朝顔形円筒埴輪の口縁基部の破片で、黄褐色を呈する。胎土中には砂粒を多く含み、小礫の混入は少ない。凸帯(タガ)は台形状を呈している。外面はタテハケによる一次調整ののち、二次調整として凸帯上部にB種ヨコハケを施す。内面はナナメハケによる調整で、凸帯の裏側には横方向にナデがみられる。2は二段目凸帯付近の円筒埴輪片で赤褐色を呈する。胎土中には石英、長石および白色骨針状物質が多く含まれている。外面はタテハケによる一次

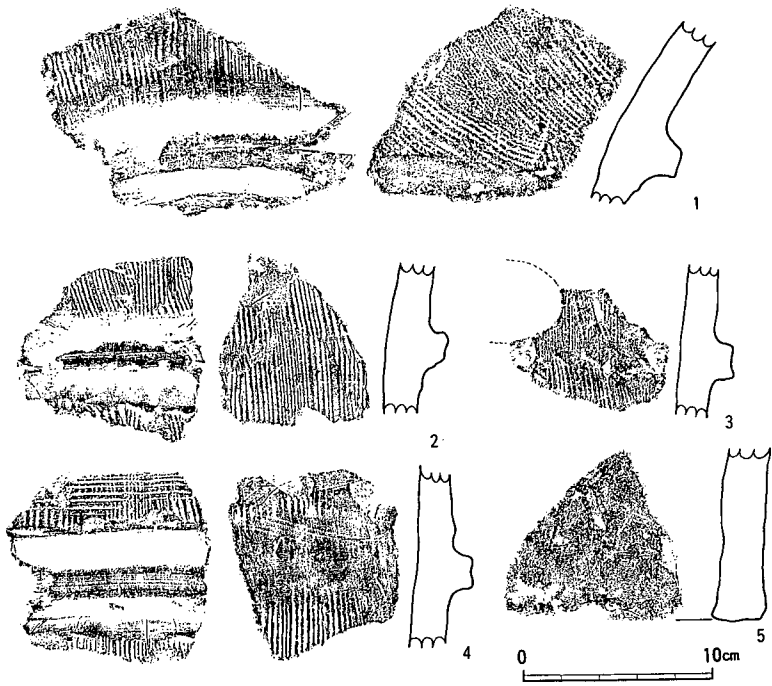


図10 円筒埴輪 (1/4)

調整のみで、内面には止めるタテハケを用いている。凸帯は上端がやや突出し、台形とM字形の中間形態を示す。3も赤褐色を呈するもので、胎土中に骨針状物質を含んでいる。外面は一次調整のタテハケ、二次調整として凸帯上部にB種ヨコハケを用いる。内面はタテハケ調整のみである。凸帯は下端の突出が著しく、M字形を呈している。スカシ孔は全体にやや楕円形にちかく、外面よりも内面の方が大きく穿たれている。4も3と同様の胎土・色調を有するものである。外面はタテハケによる一次調整のうち、B種ヨコハケによる二次調整を施す。内面はタテハケであるが、凸帯の裏面にはナデがみとめられる。凸帯はM字形にちかく、上下のナデも丁寧である。5は底部片で黄褐色を呈する。胎土中に骨針状物質を含む。内外面ともに粗いナデがみられる。

これらの円筒埴輪の厚みは、一・〇〜二・三cmと比較的厚くつくられ、焼成も堅緻である。外面に黒斑が認められないことから、窯窯による焼成と考えられる。

四 出土遺物をめぐる二、三の検討

1 遺物の出土状態について

遺物の出土状況に関しては、徳川氏の略報にもあるように、詳細な記録類（図面や写真）がすでに失われているため、正確な出土位置は不明である。しかし、幸いにも徳川氏の発掘記録のメモに大まかな出土位置が記載されているので、ある程度の復元が可能である。

個々の遺物の状態とメモを参考に作成したのが、図一一の遺物出土状況の推定復元図である。これによると、三角板鋳留短甲と横矧板鋳留短甲の二領は、主体部の東端に埋納されている。出土時は、二領の短甲が縦方向に入れ子の状態で並べられていた。これらがもともと寝かされた状態で埋納されていたことは確かといえる。しかし、前胴を上にしたか、下にしたのかについては定かではない。ただ、横矧板鋳留短甲がきわめて小型に作られていることや、三角板鋳留短甲の前胴がやや開ききみであることから、横矧板鋳留短甲の方がもう一方の短甲に包まれる形で、東端部に埋納されていたと推定される。いずれにしても、詳細なデータが乏しいのでその判断は保留しておきたい。

一方、鉄刀や鉄剣類は短甲よりも西側から、重なるような形でまともに出土したらしい。それについて、胡籙

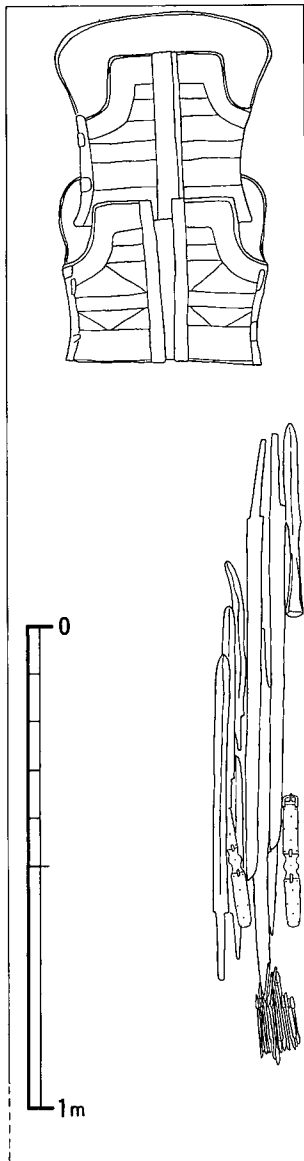


図 11 遺物出土状態の復元図

金具と鉄鏃群が縦方向に検出されている。鉄剣(一)の関付近には胡籙に付属する吊手金具が錆着していることや、鉄刀(二)の切先に鉄鏃塊が錆着する点からも、そのことが窺われる。また、鉄刀(二)が切先を西側に、鉄剣(一)が切先を東に向けて埋納されていたことが分かる。鉄鏃はほとんどが複数で錆着していることから、束状ないしは胡籙に盛られた状態で副葬されていたと思われる。鉄鏃塊の中には、胡籙本体の一部が付着しているものがあることから、それが分かる。これとは別に、より西側の離れた箇所からも鉄鏃群が検出しているらしい。鉄鉾や石突に関しては、他の遺物の痕跡がない点より、出土位置の特定は難しい。棺上あるいは棺外に置かれた可能性もある。いずれにせよ、これら鉄製武器・武具類が単一施設内の近接した場所に、まとめて埋納されていたことは明らかである。

副葬品の中で、とくに短甲の埋納状態の重要性が指摘されている。田中新史氏の分析では、鋌留短甲の出現段階では、二領の短甲をそれぞれ頭位と脚位の二か所に分けて、棺外の木口板に接して立てる例が一般的な埋納方法⁽¹⁶⁾とされ

ている。この方法を採る例として、千葉県八重原一号墳や京都府二子山南墳等が挙げられる。棺内埋納か棺外埋納かは別として、御嶽山古墳の短甲埋納の状態とは明らかに異なっており、本例はむしろ少数例に属すと考えられる。今のところ、同種の埋納を示す例は見当たらない。鋳留短甲二領を出土する古墳が、ごく短期間に集中して見られる現象をとらえて、田中氏は大王側の政權交代期に関連して、在地首長に対し甲冑が広範囲に配布された結果と考えている⁽¹⁷⁾。この問題は武具のみでなく、舶載の武器や装身具等の副葬のあり方とも関係する重要な提言といえよう。

2 胡籙金具について

本古墳から出土した遺物の中で、最も注目すべきものと認識できる。

近年、胡籙に関して、その多様な付属金具の集成に基づいた精緻な研究が行われ、形態や変遷についても具体的に検討され始めた⁽¹⁸⁾。そうした中で、坂靖氏は良好な出土状態を有する例をもとに、胡籙金具本体の復元案とその編年案を提示している⁽¹⁹⁾。

そこで、これらの研究成果を参考にして、御嶽山古墳から出土した胡籙の吊手金具の類例を比較検討したい。

前にも述べたように、本例は鉸具を伴う三枚構成の吊手金具である。同種のものとしては、日本では福岡県月の岡古墳・京都府私市田山古墳・愛知県おつくり山古墳・福井県天神山七号墳・兵庫県カンス塚古墳・千葉県内裏塚古墳が主なものである。韓国では福泉洞22号墳例が有名である(図二一)。

これらの吊手金具は、確かに形態的にはきわめて酷似する例もあるが、表二に示したように、その大きさや材質、および細かな構造の面では、かなりの差異が認められる。日本の出土品中では、革綴短甲を伴う点で初現期のものと考えられる天神山七号墳例が、全長一四・五cmともっとも小型品である。これに対して、五世紀中葉頃に位置づけら

世田谷区御嶽山古墳出土遺物の調査

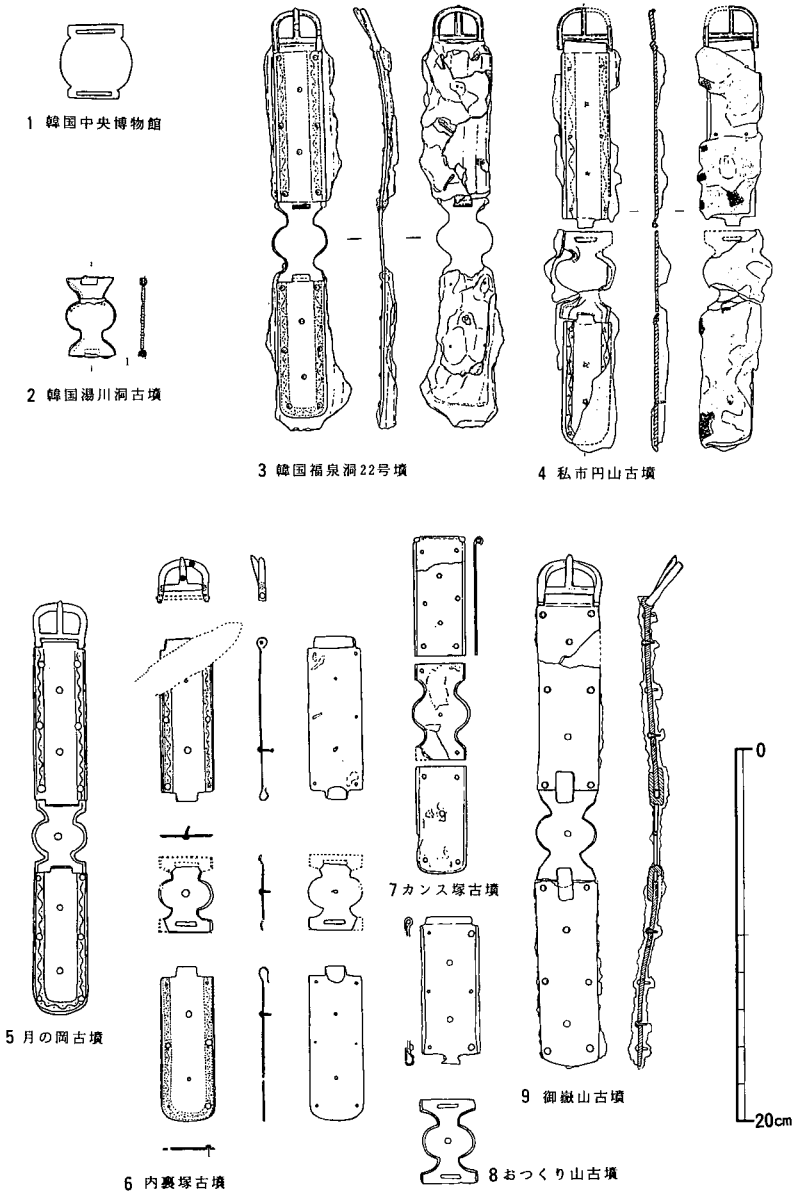


図12 三枚構成をもつ胡籥吊手金具の諸例

表2 三枚構成の胡籛吊手金具の材質

構成部分 出土古墳	全長×幅 (cm)	絞 具	上部板状 金具	中円板	下部板状 金具	上下金具の連結方法
福泉洞 22号墳	①21.6×2.6 ②20.0×2.6	金銅製	金銅製	金銅製	金銅製	舌状造り出しによる。
月の岡古墳	22.0×2.8	金銅製	金銅製	金銅製	金銅製	舌状造り出しによる。
カンス塚古墳	×2.7		金銅製	金銅製	金銅製	絞具は軸受・他鉋留め。
私市円山古墳	①22.6×2.5 ②21.7×2.5	金銅製	鉄地金銅 張製	鉄地金銅 張製	鉄地金銅 張製	舌状造り出しによる。
天神山7号墳	①14.5×1.6 ②14.0×1.6	鉄 製	銀 製	鉄 製	鉄 製	鉋留め。
おつくり山古墳	×3.0		金銅製	金銅製		舌状造り出しによる。
御嶽山古墳	①27.8×3.4 ② ×3.4	金銅製	鉄製	金銅製	鉄 製	別造りの舌状金具による。
内裏塚古墳	21.8×2.8	金銅製	金銅製	金銅製	金銅製	舌状造り出しによる。

れる月の岡古墳・内裏塚古墳例は二二cm前後と大型化している。これら二例は、韓国福泉洞22号墳例にきわめて似たつくりを示しており、同じ系統の工人によって製作された可能性も指摘されている。私市円山古墳例については、鉄地金銅張製という技法的に新しい要素を有するものの、形態的には上記の諸例と共通するつくりをもっていて、舶載品と考えられている。これらに比べて、御嶽山古墳例はさらにひとまわり大きくつくられ、全長二八cmちかくを有する大型品といえる。

材質の面では、絞具に関しては金銅製と鉄製の二種類に限られるようである。しかし、板状金具については、金銅製、鉄製、鉄地金銅張製というように多様なあり方が存在している。また、中円板は金銅製が主体的ではあるが、天神山七号墳例のように、銀製のものも認められる。ここで注目したいのは、上下の板状金具と中円板は普通同じ材質で作られているのに対し、天神山七号墳例と御嶽山古墳例に限っては、鉄と銀、鉄と金銅というように、異なる材質を組み合わせていることである。

帯状金具どうしを連結する方法としては、胡籛本体に直接鉋留するカンス塚古墳や天神山七号墳例がある。厳密に言えば、カンス塚古墳の場合、絞具だけは軸受により連結させているが、天神山例はすべての金具が独立している。金銅製の板状金具を用いた場合は、月の岡古墳例や内

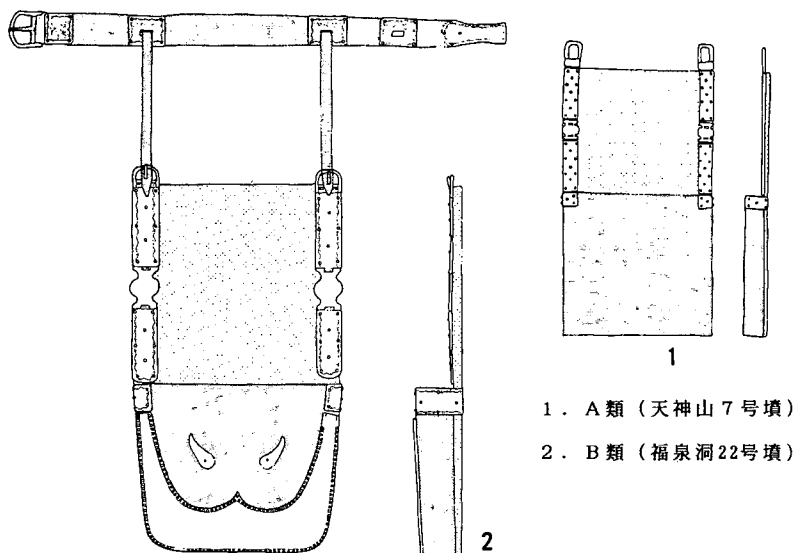


図13 胡籙の復元

1. A類（天神山7号墳）
2. B類（福泉洞22号墳）

裏塚古墳例にみるように、板状金具の先端を舌状に造り出し、中円板のスリットに差し込んで、先端をU字形に折り曲げて連結する方法が一般的と解釈される。御嶽山古墳例の場合、基本的には同じ手法を用いてはいるが、連結の役目を果たす舌状金具を別造りの鉄製金具にしている点、他と大きく異なる点である。技術的にみても、むしろ難しいと思われる方法を選択した理由として、吊手金具の大型化に伴う強度の必要性があったためと理解される。むしろ、実用性を重視したつくりと解釈したい。

ところで、坂氏による胡籙の復元によれば、導入期（五世紀前半～中葉）の胡籙にはAとB二つのタイプがある(図一三)。A類は方立部上端のコナーに取りつく、コ字形金具を伴うもので、天神山七号墳例や私市円山古墳例が含まれる。B類は胡籙の方立部前面につく、U字形の飾金具を特徴とするもので、韓国福泉洞22号墳をはじめ、月の岡古墳や内裏塚古墳例などの、金銅製三枚造の吊手金具を伴うものが多い。

御嶽山古墳例の場合、吊手金具のみの出土であり、他

の付属金具は資料中には存在しなかった。そのため、胡籙の形式を特定することは困難であるが、つくり自体の素朴さと実用性を重視するならば、むしろA類にちかいものであったと思われる。A類の胡籙は出土古墳の年代から、五世紀前半から中葉にかけて用いられたと推定されており、本例もその年代幅の中におさまる製品と考えられる。

吊手金具自体の規格がすなわち、胡籙の形態や大きさに関連するものかどうかは、さらに類例の増加を待たなければならぬ。ただ、吊手金具の形態に関しては、田中氏も指摘されているように、中円部を大きく造り出すものがより古式であることは、韓国中央博物館所蔵の資料と、天神山例との比較により妥当な見解⁽²⁰⁾と思われる。

3 鉄鏃について

図化し得た鉄鏃七二本のうち、鏃身の形態が明らかかなものは四七本である。これに未実測の鉄鏃を含めると五一本になる。これらは鏃身の形や特徴により、以下のように、大きく五種類に分類できる(図一四)。

A類 鏃身部が長三角形を呈するもので、身関を有し、刃部先端に向かってしだいに細くつくるもの。

B類 鏃身が三角形をなし、頸部に片逆刺⁽²¹⁾を有するもの。

C類 鏃の刃部がほぼ平行し、身関が明瞭ではなく、鏃の先端に丸みを有するもの。柳葉鏃に含まれる。

D類 刀子形を呈する鏃身を有するもので、いわゆる片刃箭鏃といわれるもの。

E類 鏃身が短く、三角形に尖る形態を示し、身の中央に稜がある。圭頭ないし鑿箭鏃に含まれる。

A類に属す鉄鏃は二〇本でもっとも多い。これら長三角形鏃の中でも、細かな形態の差異が認められ、さらに五類に細分が可能である。

①類は鏃の先端が直線的に尖るもので、身関も直角にちかい形態を有する。②類は①類に比べ、鏃身の肩に角度を

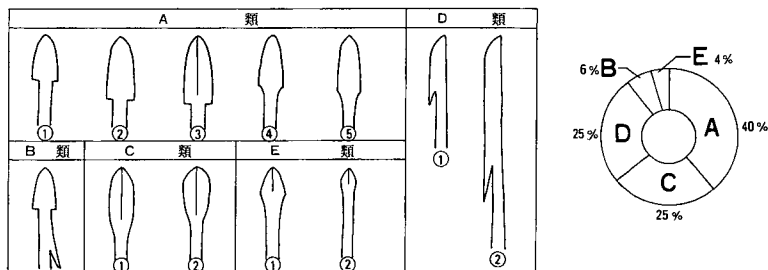


図 14 鉄鏃の分類と出土の割合

つけているため、先端部はやや鈍角になっている。③類としたものは、剣身形をなすものであり、鏃の中央に稜があり先端の尖り方は鈍い。身関は明瞭である。④類と⑤類は身関の切り込みが弱い撫角のもので、短身の鏃を④類、長身の鏃を⑤類とした。⑤類の鏃は②類と同様に、鏃の先端付近に肩を有している。

B類の鉄鏃は確実なもの三本であり、全体からみれば客体的な存在といえる。なお、鏃塊中にあるため、判別が不可能な個体も多々あると考えられる。

C類は一三本認められ、鏃身の形態により二類に細分される。①類は身関から頭部への移行が比較的緩やかなものであり、②類は身関付近が強く絞られ、身の両端に肩を有するものである。

D類は一三本と、C類と同じく多く認められる形式で、身の逆刺までの長さにより二類に分類できる。①類は短身の片刃箭鏃で主体を占めている。②類としたものは、鏃身長が8cm以上を有する長身の片刃箭鏃で、五本程が認められる。

E類は最も少なく、①類の圭頭形を呈するもの、②類の鑿箭形式をなすものがそれぞれ一本ずつである。

これにより、御嶽山古墳出土の鉄鏃については、遺存する資料のみを対象とした場合の鉄鏃構成は、長頸鏃を中心とするA類・C類・D類を主体とし、B類・E類を客体としたことが窺える。

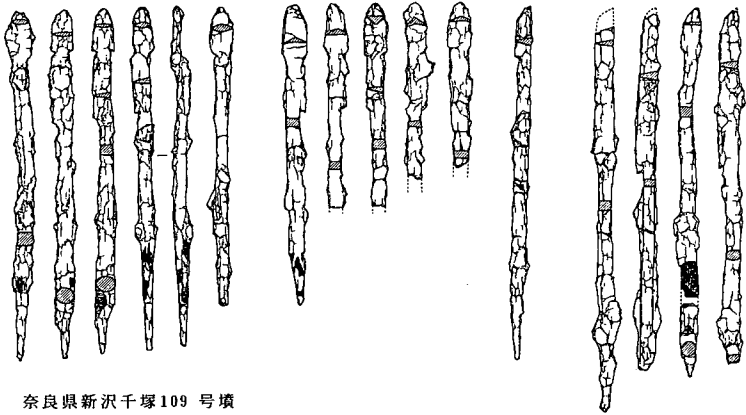
長三角形鏃や片刃箭鏃を主体とするセット関係に、特徴的なB類の鉄鏃を含んだ

出土例としては、畿内では奈良県新沢千塚一〇九号墳・一六六号墳・二八一号墳等がある。関東地方では類例は少なく、「王賜」銘鉄剣を出土した千葉県稲荷台一号墳や、やはり有銘鉄剣をもつ埼玉県稲荷山古墳等が挙げられる（図一五）。B類の鉄鏃については、短甲との共存関係から、その編年案なども提示されている。関義則氏の研究によれば、逆刺部が長く腸袂が深いものを古式とし、時期が下降するにしたがって、しだいに逆刺の外反化と腸袂の浅いものへと変化する。御嶽山古墳の出土例は、逆刺が鏃身からやや離れてつくタイプ（関分類ではA類）のもので、類例が少なく比較が難しいところである。しいて挙げるならば、出土短甲の共通性などから、千葉県八重原一号墳のものにちかいと考えられる。八重原一号墳については杉山晋作氏による考察が加えられ、片刃箭鏃との比較により、鏃の製作と配布の時期が西暦四四〇〜四五〇年頃に比定されている²⁶。

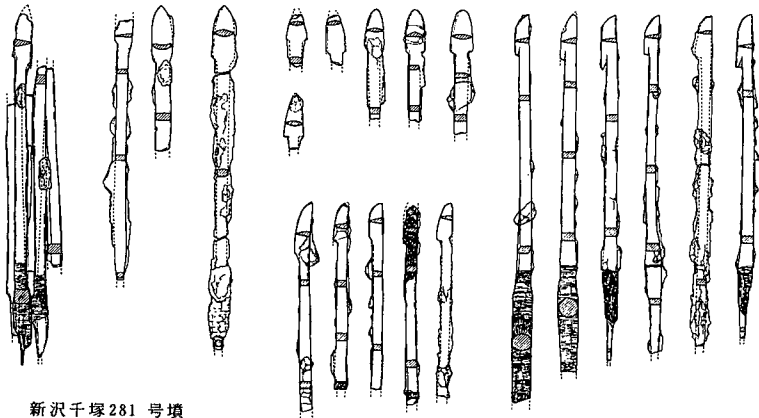
D—②類の片刃箭鏃に関しては、先に挙げた奈良県新沢千塚一〇九号墳出土例の中に、鏃身長八cm以上のものが含まれており、セット関係からも最も共通するあり方を示している。また、南九州地方の地下式横穴墓である宮崎県下北方五号墓、関東地方では群馬県鶴山古墳出土例等²⁷がある。下北方五号墓については、三角板鋌留短甲および横剗板鋌留短甲を伴出することから、时期的にみても御嶽山古墳に近い時期のものと考えられる。

以上、管見にふれた鉄鏃の類例について述べてきた。鉄鏃の様式からみた場合、本例との共通性を有する古墳が、畿内では大王権力の軍事的基盤を支えていた豪族の奥津城と推定される新沢千塚古墳群や、東国においても稲荷台一号墳のような、畿内勢力との関係が強いと考えられる古墳である点が注目される。胡鏡金具の存在をも考慮すれば、それが舶載品か国産品かの議論は別として、先進的な武器類が畿内から直接的にもたらされていた可能性が指摘できる。

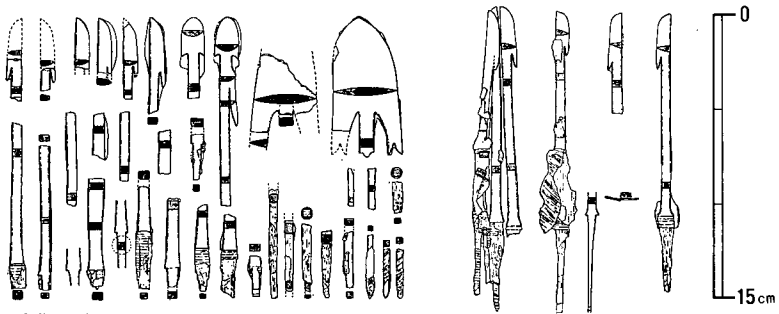
世田谷区御嶽山古墳出土遺物の調査



奈良県新沢千塚109号墳



新沢千塚281号墳



千葉県稲荷台1号墳

図15 古墳出土鉄鍔の類例

五 結語

御嶽山古墳出土の遺物についての基礎的な調査の成果と、いくつかの遺物に関して検討を試みてきた。ここでは、まとめにかえて、本古墳の編年の位置とその性格に関して、既存の研究を参考としながら、私なりに整理して述べてみたい。

古墳自体の基本的な編年の基準としては、川西宏幸氏による円筒埴輪の編年⁽²⁸⁾（以下川西編年）が有効であり、これを基礎とした地域ごとの編年も検討されている。御嶽山古墳出土の円筒埴輪の特徴としては、外面に一次調整のタテハケ、二次調整としてB種ヨコハケを有し、無黒斑であることから川西編年IV期の埴輪とされている。三角板鋳留短甲と横切板鋳留短甲を共伴する点からも、妥当な時期といえる。本墳出土の埴輪を検討された寺田良喜氏によれば、普通円筒埴輪と朝顔形円筒埴輪の二種があり、そのつくりについては、「二段の突帯をめぐらす、円形のスカシ孔を有する円筒埴輪」である点が指摘されている。また、関東地方では白石稲荷山古墳の陪塚ともみられる、藤岡市十二天塚古墳出土の円筒埴輪にも⁽²⁹⁾とも類似するとし、その時期を野毛大塚古墳との関係から、五世紀第3四半期〜第4四半期に比定されている。しかしながら、十二天塚古墳から採集されている遺物の中には、鞆袋に縫目表現を有する古式の石製刀子や、長方形革鋳短甲片などが含まれていることから、五世紀前半を中心とする時期の古墳と考えられている。⁽³⁰⁾円筒埴輪の類似性からみれば、御嶽山古墳出土埴輪はむしろ古相を示しているとは考えられないだろうか。

一方、東京湾東岸の上総地域では、金銅製厩庇付冑を出土した祇園大塚山古墳の円筒埴輪⁽³¹⁾が、御嶽山古墳の埴輪に

もっとも近い時期のものとされている。宍窯焼成でB種ヨコハケを有するIV期の円筒埴輪の中では、中段階に位置づけられており、出土した須恵器の型式が陶邑ON—四六型式期に併行することから、五世紀中葉に比定されている。萩原恭一氏によれば、房総地域における宍窯焼成の埴輪の出現は、高柳銚子塚古墳、矢那大原古墳、内裏塚古墳と、生産遺跡としての畑沢埴輪窯跡出土資料に求められ、IV期の開始期は趨勢として、これまで考えられていたよりも、少し遡る可能性があるという。内裏塚古墳群中の高柳銚子塚古墳から出土した円筒埴輪の検討から、IV期の埴輪の開始期を五世紀初頭から前葉に求める積極的な意見も提示⁽³³⁾されている。

これらの実年代の比定に関しては、なお慎重にならなければならない。しかし、こうした動勢に対して、東京湾西岸に位置する本墳の埴輪も、まったく無関係ではいられない。現状では、五世紀中葉を著しく降る時期の所産とは考えにくいのである。

次に、他の副葬品の内容から、この点について考えてみたい

御嶽山古墳出土の二領の短甲を検討するなかで、田中氏は五世紀代における東京湾岸の短甲出土古墳を三期に編年されている⁽³⁴⁾。以下にその内容を整理する。

I期 革綴短甲を副葬する時期。(野毛大塚古墳・大寺山洞穴)

II期 鋳留短甲が副葬される時期で、三角板鋳留短甲を含む点で次期と画される。(姉崎二子塚古墳・朝光寺原一号墳・八重原一号墳・御嶽山古墳など)

III期 横刃板鋳留短甲一領を副葬する時期。(稲荷台一号墳・東間部多一号墳・弁天山古墳・野焼二号墳・鹿島塚六号墳・大寺山洞穴など)

各期の年代については、I期が五世紀第2四半期、II期が第3四半期、III期が第4四半期頃としている。ただし、

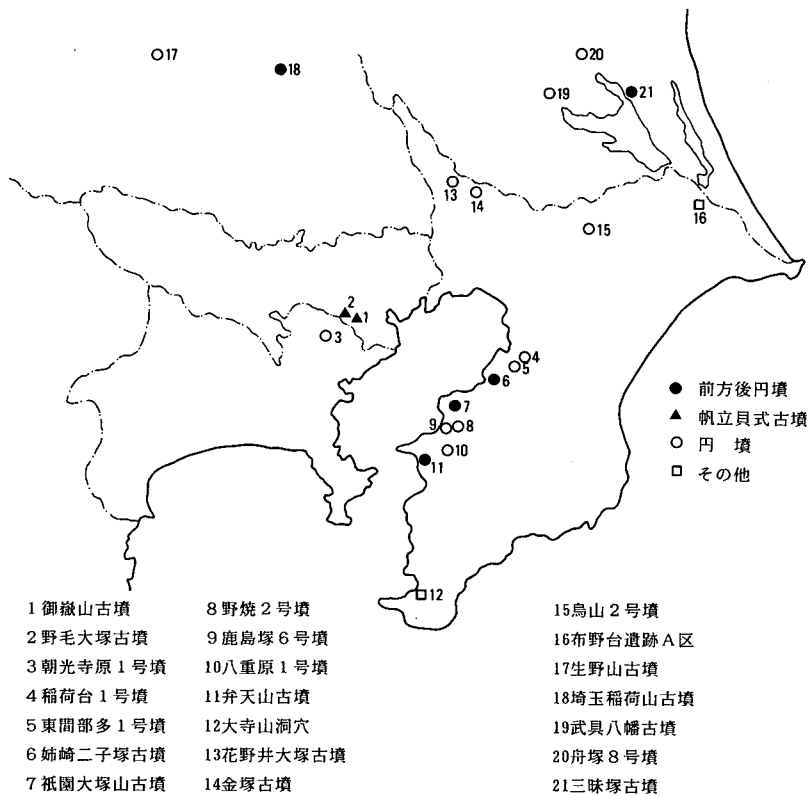


図 16 東京湾を中心とする 5 世紀の甲冑出土古墳

田中氏自らも指摘されているように⁽³⁵⁾、板鉾留短甲の型式差が即ち製作年代の違いとする考え方に、多少の修正の必要があり、個々の短甲については、その製作時期を細かく再検討する余地も残されている。一例を挙げれば、千葉県稲荷台一号墳から出土した短甲に関しては、鉄折返覆輪を有する定式化した段階のものであり、古墳から出土した須恵器が陶器 TK-110 八型式の特徴を有することから、その暦年代を五世紀中葉後半とする見解⁽³⁶⁾も示されている。つまり、横板鉾留短甲の出現と定式化の上限が、これまで考えられていた時期より若干古く遡ることになる。しかし、暦年代の流動性はあるもの

の、先の時期区分は副葬短甲の変遷という視点から見た場合、ある程度の普遍性をもつものと考えられる。御嶽山古墳は、この中でⅡ期に位置づけられており、出土した二領の短甲とも皮組・皮包覆輪を採用している点で、定式化前段階の鋳留短甲といえる。相対的な編年においては、まさに中期中葉の遺物相を示しており、その暦年代を五世紀中葉とする見解を支持したい。

ところで、五世紀中葉後葉にかけて、東京湾周辺で甲冑を出土する古墳の墳形やその規模には、ある種の特徴が認められる(図一六)。上総では、埴輪を有する姉崎二子塚古墳↓祇園大塚山古墳↓弁天山古墳というように、一〇メートル級的大型前方後円墳から継続的に出土する。また、これ以外の径三〇m未満の小円墳からも多く出土する傾向がある。一方南武蔵では、全長五二mの帆立貝式前方後円墳である御嶽山古墳と、径三七mの円墳である朝光寺原一号墳からの出土が知られるだけである。中小の古墳から短甲が検出されるという点では、両地域に共通性が窺われる。この時期、大首长以外の中小豪族の中にも、先進的な武器類を入手できる力が蓄えられていたことが分かる。

いずれにしても、地方の豪族層に対する、畿内の大王勢力側からの継続的な甲冑の配布を考えた場合、南武蔵における御嶽山古墳の位置は、野毛大塚古墳に次ぐ首长墓という性格に変わりはないものと考えられる。このことは、両者がともに同じ墳形を採用していることから明らかといえよう。

野毛大塚古墳の築造時期に関しては、正式な報告書が未刊なので詳しい検討はできないが、第一主体部や第三主体部から出土した遺物の様相や、円筒埴輪の特質から中期前半に属する⁽³⁷⁾のは間違いない。少なくとも、五世紀前葉を中心とする時期と考えられる。古く検出されていた第二主体部の位置づけが問題となるが、仮に一代を間においても御嶽山古墳の時期との矛盾はないものと思⁽³⁸⁾う。

最近になって、多摩川流域における前期古墳に関連して、新たな事実が明らかになっている。田園調布にある宝萊

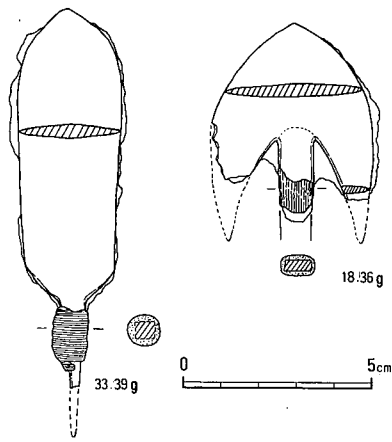


図17 砧中学校7号墳出土鉄鏝 (1/2)

あるばかりか、『日本書紀』記載の伝承を無批判に取り入れ、ある種(40)の理念だけが先行するかたちで構築してきたかにも見える「南武蔵の古墳編年」に対して、再検討の必要性を強く感じさせる。

以上述べてきた点を要約すれば、御嶽山古墳出土の遺物は、すべて中期中葉の特徴を有するものである。その時期については、鋌留短甲をはじめとする鉄製武器・武具の様相からみて、五世紀第2四半期と第3四半期との交、つまり西暦四五〇年前後におくのが妥当ではないかと考えられる。そして、前代の首長墓である野毛大塚古墳との系譜的なつながりをもちながらも、畿内の大王勢力との直接的な交渉を背景に、流域を統括する次代の首長墓としての性格を色濃く有していたことが、遺物の調査を通じて再確認されたといえよう。

山古墳の範囲確認調査で、墳丘の周辺から多くの土師器が検出され、土器の型式からその築造時期が四世紀前半に遡ることが確実となっている。(39)従来言われていた古墳の年代よりも半世紀以上古くなる。また、学習院史学会によってかつて発掘された、世田谷区砧中学校七号墳(全長六五mの前方後方墳)より出土した鉄鏝(図一七)を再調査したところ、有茎で幅広の鏝身をもつ古いタイプの柳葉鏝が複数含まれていることが分かった。ここでは詳しい検討はできないが、その所産時期については、四世紀末葉までにおさまるものと考えられる。これらのことは、当該地域における中期古墳の出現時期の問題に大きな影響を及ぼすと認識できる。これまで、出土遺物による検証が不十分で

足掛け二年以上にわたる調査の間、多くの方々に御助力を頂戴した。とりわけ、史料館前館長である高埜利彦教授をはじめ、館員の長佐古美奈子氏と西田かほる氏には、調査の過程で便宜をはかっていただいた。また、御嶽山古墳の調査者でもある徳川義宣氏からは、発掘当時の状況について多くのことを御教示いただいた。資料の構造や材質に
関しては、同僚の長佐古真也氏に協力を仰ぎ、遺物の写真撮影はすべて星野薫氏にお願ひした。

本稿を草するにあたっては、文献や埴輪研究の現状について萩原恭一氏に、福井県天神山七号墳出土の胡籬金具に
関しては、足立尚計氏と中司照世氏より懇切丁寧な御教示を賜った。また、多摩川流域の古墳については、大谷猛氏
や野本孝明氏より日頃より御助言をいただいている。以上の方々に対して、末筆ながら記して感謝の意を表します。

(一九九六年一二月)

註

- (1) 田中新史「御嶽山古墳出土の短甲」(『考古学雑誌』六四卷一号、一九七八年)。
- (2) 寺田良喜他「野毛大塚古墳」I・II(野毛大塚古墳調査会一九九二・一九九三年)。
- (3) 寺田良喜「多摩川中・下流域左岸の埴輪再考」(滝口宏先生追悼考古学論集編集委員会編『古代探叢』IV、一九九五年)。寺田良喜「御岳山古墳(第二次)」(世田谷区教育委員会『一九九二年度世田谷区埋蔵文化財調査年報』、一九九四年)。
- (4) 笠井新也「武蔵国玉川村古墳出土の七鈴鏡」(『考古学雑誌』三〇巻四号、一九四〇年)。
- (5) 西岡秀雄「荏原台地に於ける先史及び原史時代の遺跡遺物」(『考古学雑誌』二六巻五号、一九三六年)。
- (6) この時の調査成果は、世田谷区史編さん室編『世田谷区史料―第八集考古編』(一九七五年)に掲載されている。
- (7) 註(6)に同じ。
- (8) 二領の短甲は現在、学習院大学史料館の所蔵資料に

なっている。短甲の返還に際しては、館員の長佐古美奈子氏の尽力によるところ大である。

(9) 註(1)に同じ。

(10) 御嶽山古墳出土の短甲の詳細に関しては、田中新史氏による論考ですべて言い尽くされているので、本稿での説明は省略させて頂いた。

(11) 後藤守一「原史時代の武器と武装」『考古学講座』第一巻、一九二八年。臼杵勲「古墳出土鍔の分類と編年」『日本古代文化研究』第二号、一九八五年。

(12) 臼杵一九八五年による。

(13) 近年、この種の金具を「中円板帯状金具」(早乙女一九八七年)や、「一对式中円部造り出し形吊手飾金具」(田中一九八八年)などとも呼称されている。名称が未だ十分統一されていないとは言えず、すべて飾金具なのかどうか不明確ではない現状では一応、その機能面を重視して、「吊手金具」の用語を用いることにした。

(14) 坂靖「胡鐸の復元―寺口千塚の資料を中心として―」『古代学研究』一二〇、一九九〇年。同「胡鐸の系譜」(森浩一編『考古学と生活文化』、一九九一年)。

(15) 杉山秀宏「古墳時代の鉄鍬について」『橿原考古学研究所論集』八、一九八八年。田中新史「古墳時代中

期前半の鉄鍬(一)」(滝口宏先生追悼考古学論集編集委員会編『古代探叢』IV、一九九五年)。

(16) 田中新史「五世紀における短甲出土古墳の一樣―房総出土の短甲とその古墳を中心として―」『史館』第五号、一九七五年。

(17) 註(1)に同じ。

(18) 早乙女雅博「古代東アジアの盛矢具」『東京国立博物館紀要』第二三三号、一九八七年。田中新史「古墳出土の胡鐸・靱金具」『井上コレクション弥生・古墳時代資料図録』一九八八年)言叢社刊。

(19) 註(14)に同じ。

(20) 註(18)田中論文。

(21) この型式の鍬の名称については、「異形腸扶長頸鍬」(杉山・田中一九八九年)や、「逆刺独立三角・柳葉形鉄鍬」(関一九九一年)などがある。本稿では、単に頸部に片逆刺を有する長頸鍬という認識にとどめている。

(22) 伊達宗泰他「新沢千塚古墳群」(奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告)第三九集、一九八一年)。

(23) 滝口宏他「千葉県市原市稲荷台一号墳出土・王賜」銘鉄剣概報」(市原市教育委員会、一九八八年)。

(24) 柳田敏司他「埼玉・稲荷山古墳」(埼玉県教育委員

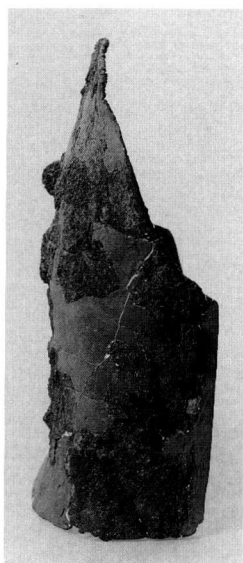
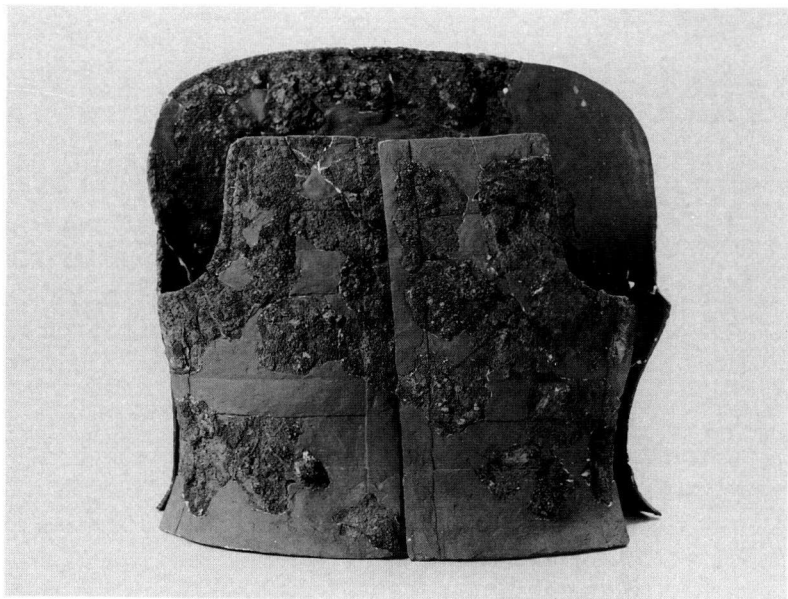
- 会、一九八〇年。
- (25) 関義則「片逆刺独立三角・柳葉形鉄鏃の消長とその意義」(『埼玉考古学論集』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団一九九一年)。
- (26) 杉山晋作・田中新史「千葉県君津市所在八重原一号墳・二号墳の調査」(『古墳時代研究』Ⅲ、一九八九年)。
- (27) 註(15)の杉山および田中論文による。
- (28) 川西宏幸「円筒埴輪総論」(『考古学雑誌』六四卷一、一九七八年)。
- (29) 註(3)寺田一九九五年による。
- (30) 志村哲「十二天塚古墳の築造年代について―採集遺物からみた築造年代の分析―」(『群馬県史研究』二九、一九八九年)。
- (31) 白井久美子「祇園大塚山古墳の埴輪と須恵器」(『古代』第八三号、一九八七年)。
- (32) 萩原恭一「房総における埴輪の変遷と分布」(『研究紀要』一五、一九九四年)。「関東地方の埴輪生産遺跡」(『研究連絡誌』第五号、一九八三年) 財団法人千葉県文化財センター。
- (33) 白井久美子「高柳銚子塚古墳をめぐる諸問題」(『日本考古学』第二号、一九九五年)。
- (34) 註(1)に同じ。
- (35) 田中新史「補遺 五世紀における短甲出土古墳の様相」(『土筆』創刊号、一九九一年)。
- (36) 白石太一郎「須恵器からみた年代」(滝口宏他「千葉県市原市稲荷台一号墳出土「王賜」銘鉄剣概報」一九八八年)。
- (37) 橋本博文「王賜銘鉄剣と五世紀の東国」(『古代を考える東国と大和王権』原島礼二・金井塚良一編) 一九九四年)。
- (38) 多摩川流域において、野毛大塚古墳につづく首長墓として滑石製刀子や透彫金具を出土した八幡塚古墳をおく意見もある。筆者は野毛大塚古墳第二主体部出土の石製刀子との類似性から、八幡塚古墳の時期は野毛大塚古墳の最終埋葬の時期にきわめて近いのではないかと考えている。
- (39) 野本孝明「宝萊山古墳の範囲確認調査出土の土師器について」(『東京考古』一四、一九九六年)。
- (40) 一九九一年に行われたシンポジウム『多摩川中・下流域の古墳をめぐる諸問題』(東京考古談話会主催)において、對比地秀行、寺田良喜、野本孝明三氏により、新たな知見にもとづくさまざまな問題が討議された。ま

た、席上、鶴見川流域の前期古墳に関しても見直しの必要があることが、鈴木重信氏より問題提起されている。

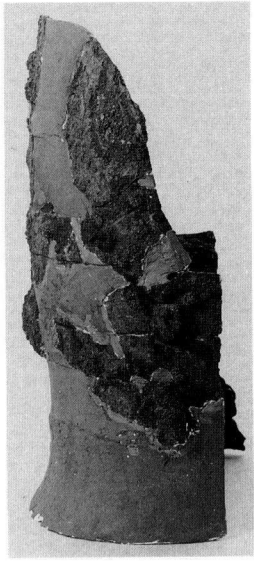
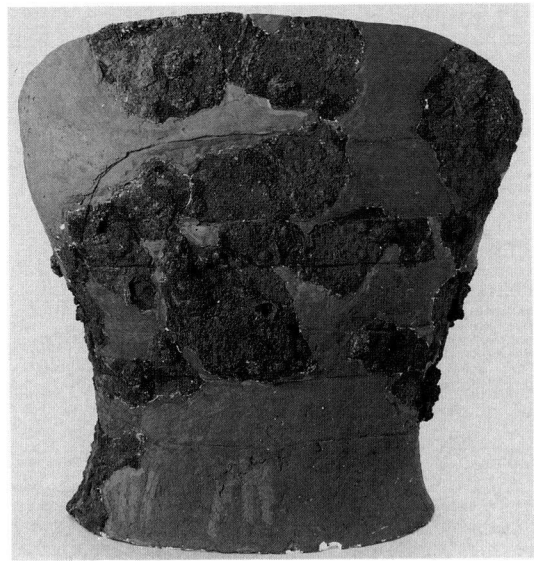
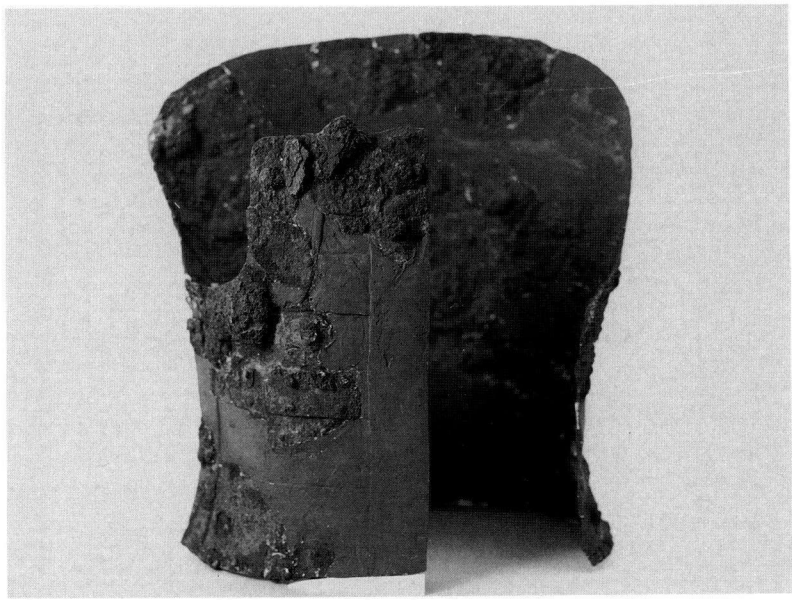
挿図引用文献

- 図一 上、寺田一九九二より作成。
下、世田谷区史編さん室一九七五より転載。
- 図二 田中一九七八を一部改変して転載。
- 図一一 田中一九七八を参考に作成。
- 図一二 坂一九九一より転載。
- 図一三 早乙女一九八七・田中一九八八・鍋田勇他「私市
円山古墳出土の胡籙金具」(『京都府埋蔵文化財情
報』三一号)一九八九年より、一部改変して転載。
- 図一五 伊達他一九八一・滝口一九八八を一部改変して転
載。
- 図一六 橋本一九九四・田中一九九一より作成。
- 表二 早乙女一九八七・田中一九八八・鍋田他一九八九
等を参考に作成。

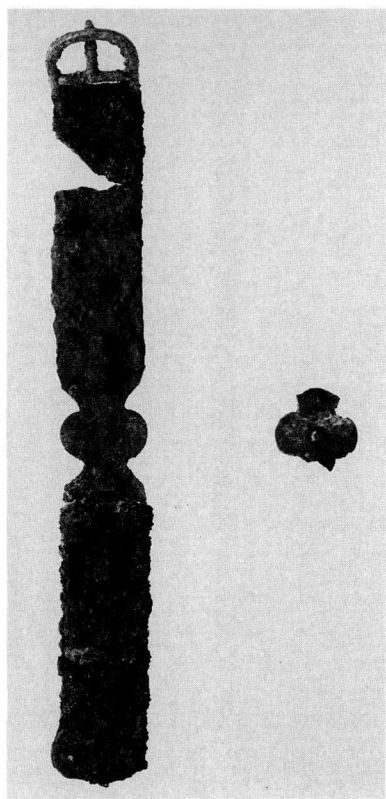
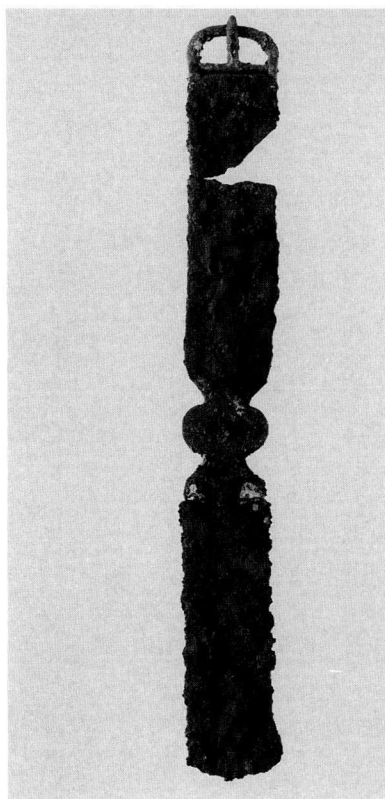
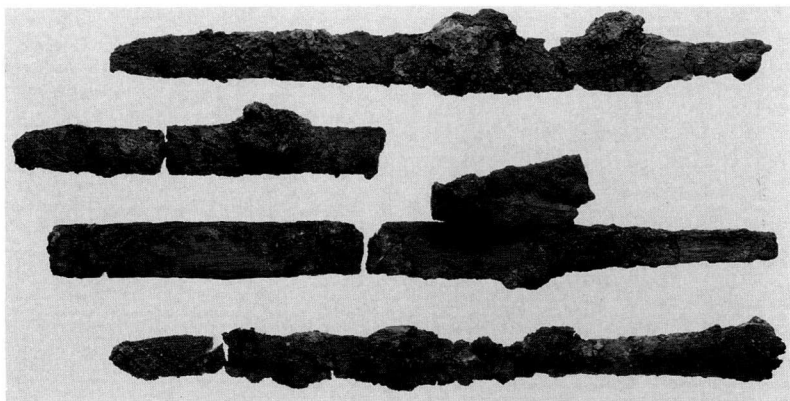
図版一 御嶽山古墳出土・三角板鋳留短甲



図版二 横矧板鋌留短甲



図版三 上―鉄剣・鉄鉾 下―胡録吊手金具



図版四 鉄鏃・刀子・釘状鉄製品

